

放送大学の地域貢献

地域貢献研究会における議論と 学習センターのプロジェクト報告

2013 年度



放送大学
地域貢献研究会

学長メッセージ

放送大学はこれまでも地域に展開した学習センターを拠点として、さまざまな形で地域貢献を推進してきました。2012年度には本学の教職員を構成員とする地域貢献研究会を立ち上げ、大学としての地域貢献の可能性を議論しました。議論のなかで見えてきたのは、本学の強みである以下の3点を活かした地域貢献事業を推進するということです。

1. 全国に展開する知の拠点（50か所の学習センター、7か所のサテライトスペース）
2. 即戦力のある人材（約9万人の社会人学生とそれをサポートする880人以上の学習センター教職員）
3. 強力な教育情報システム（全国に展開する放送授業・面接授業・公開講演会など）

本学の学生の多くは、全国に展開する各学習センターのもとで学んでいます。本学の調査によれば、その中には既に地域のリーダーとして活躍中の人たちが多数おられます。2013年度は、本学の学習センターが中心となりこれらの人たちの活動を支援し、さらにそれに続く新しいリーダーを養成するために、地域のニーズに応える21件の地域貢献プロジェクトを立ち上げました。

これらのプロジェクトを通して、地域の発展に貢献するとともに、21世紀の日本をリードする人材を輩出することを願っています。

放送大学学長 岡部 洋一

目次

はじめに

第1章 放送大学における地域貢献とは何か	1
1. 本学に求められる地域貢献	1
(1) 生涯学習分科会	
(2) 第2期教育振興基本計画	
2. 放送大学における地域貢献の位置づけと取り組み	2
(1) これまでの放送大学における地域貢献の位置づけ	
I. アクションプラン2012	
II. 第II期業務運営計画	
III. 放送大学大学院博士課程設置について	
(2) 2013年の各学習センターにおける具体的な取り組み事例 (学長裁量経費Ⅲ(学習センター支援)における地域貢献)	
第2章 地域貢献研究会のまとめ	5
1. 地域貢献研究会での主な議論	5
2. 放送大学にどのような地域貢献機能が必要か	6
3. 放送大学における地域貢献の定義	7
I. 放送大学における地域貢献とは	
II. 本部の役割(使命)と学習センターに求められる地域貢献	
4. 地域貢献研究会を受けた本部からの発信	8
(1) エキスパート科目の創設	
(2) HPの立ち上げ	
第3章 放送大学における地域貢献の推進に向けて(今後の課題と方向性)	10
1. 予算	10
2. 組織体制及び事務体制	10
3. まとめ	10
資料	
1. 各学習センター実施の地域貢献プロジェクト報告書	13
2. 地域に関連する面接授業科目一覧	85
3. 科目群履修認証制度(放送大学エキスパート)	91
4. 地域貢献研究会構成員リスト	93

はじめに

- 経済・社会が高度化・グローバル化する中、地域の発展を図る上で、「知の拠点」としての大学による地域貢献に大きな期待が寄せられている。教育基本法及び学校教育法においては、大学が果たすべき役割として、学術研究、人材育成に加え、教育研究の成果を広く社会へ提供することが位置付けられており、政府の答申等においても、地域再生の核となる大学づくりの重要性が改めて指摘されている。こうした政府の状況も踏まえ、放送大学における地域貢献の現状の把握と今後の取組について検討を進めるため、2012年11月に「放送大学における地域貢献研究会」が設置された。
- 2012年11月の設置以降これまで本研究会を5回開催し、放送大学の地域貢献の在り方等について議論を行ってきた。各地域の所長、専任教員等により、本学の地域貢献について議論を行うことは初めてのことであり、本学の地域貢献を推進していく上で必要な様々な知見及び視点を獲得することができた。同時に、本学で地域貢献を推進していく上での課題も明らかになった。そこで、本研究会の成果をここに報告させていただくとともに、これが、今後の放送大学における地域貢献の推進の一助に資することを期待したい。

第1章 放送大学における地域貢献とは何か

1. 本学に求められる地域貢献

まず、放送大学における地域貢献について触れる前に、政府の答申等から本学に求められている地域貢献について考えてみたい。現在、大学は地域に開かれ、地域に密着した取り組みが盛んに求められている。2012年6月に文部科学省が公表した「大学改革実行プラン」にも「地域再生の核となる大学づくり」がうたわれており、地域の大学の人材育成機能、地域社会との連携、生涯学習機能を強化することの必要性が掲げられている。大学が地域の一員としての役割を果たすことが求められている中で、以下の通り、政府の答申等からは、放送大学に期待されている役割の大きさを読み取るができる。

(1) 生涯学習分科会

2011年6月に発足した第6期中央教育審議会生涯学習分科会では、「生涯学習社会の構築」の中心的な役割を担う社会教育行政の今後の推進の在り方について、集中的に審議を行った。そして、2012年1月に審議内容を「第6期中央教育審議会生涯学習分科会における議論の整理」として取りまとめた。

その中で、地域における課題解決に向けた学習の重要性を指摘し、放送大学の活用の有効性について言及されている。

(前略) 地理的・時間的制約を受けにくい特長を有する放送大学の活用も有効であり、平成23年10月には、CS放送から世帯普及率が高いBSデジタル放送に移行するなど、大学教育を受ける機会の一層の拡大を図ってきたところである。今後は、ICTの進展をはじめとする昨今の急激な社会状況の変化も踏まえ、多様化するニーズに対応するための環境整備の検討や、地域における課題解決に向けた学習の重要性を踏まえ、地方公共団体や他大学等とも連携し、少子高齢化、防災、環境、健康等の課題に対応した科目の充実、地域リーダー育成等のために学習センターを活用した公開講演会等の充実を図ることも望まれる。

(2) 第2期教育振興基本計画

教育基本計画は、教育基本法（2006年法律第120号）に示された理念の実現と、我が国の教育振興に関する施策の総合的・計画的な推進を図るために政府として策定する計画（同法第17条第1項）であり、2013年6月14日に第2期教育振興基本計画が閣議決定された。

その中では、社会人の学び直しの機会として時間的・空間的制約がなく学ぶことのできる放送大学等の科目の充実等が記述されるなど、放送大学に対する期待は大きくなっている。

13-5 社会人の学び直しの機会の充実

- ・スキルアップ・職種転換などのキャリアアップや再就職（出産等により一度離職した女性の再就職など）などの再チャレンジを目指す社会人の学び直しをはじめ、多様なニーズに対応した教育の機会を充実するなど、大学・大学院・専門学校等の生涯を通じた学びの場としての機能を強化する。このような観点から、イノベーションの創出を支えるプログラムや、就職や円滑な転職等につながるような実践的なプログラムを教育機関と産業界等との協働により開発することを通じて、大学・大学院・専門学校等における社会人の受入れ等を推進する。また、社会人の大学等での学習については、時間的・経済的制約が課題となっている状況を踏まえ、企業等の理解の促進を含め、環境整備を行う。さらに、時間的・空間的制約がなく学ぶことが可能な放送大学をはじめとした通信教育を行う大学における科目の充実等を一層進める。

20-4 地域における学び直しに向けた学習機能の強化

- ・大学等の高等教育機関は、本来、地域における生涯学習の拠点としての機能を有しており、その自主的な判断の下、生涯学習センター等も活用しながら、地域支援人材等を養成する人材認証制度の整備や学び直しの場としての公開講座の充実等、機能強化を促進する。
- ・また、テレビ・ラジオ放送による授業を実施し、各都道府県に学習センターを設置している等の特性を有する放送大学が、地方公共団体や他大学等と連携した授業科目や公開講演会等の充実を図り、社会人等が学びやすい学習環境を整備することを促進する。

2. 放送大学における地域貢献の位置づけと取り組み

次に、これまで、放送大学では地域貢献をどのように位置づけてきたのか整理したい。また、各学習センターでの取り組みを振り返ることで、放送大学における地域に係わる様々な取り組みについて紹介する。

(1) これまでの放送大学における地域貢献の位置づけ

I. アクションプラン 2012

アクションプランは、放送大学の中長期的な将来ビジョンを示したものであり、教職員・学生・その他関係者がビジョンを共有するためのものであるが、アクションプラン 2012は、岡部学長のもと、2012年5月に作成されたものである。その中で、学習センターにおける地域リーダー育成支援と地域貢献の重要性がうたわれている。

(学習センターの地域リーダー育成支援と地域貢献)

多くの人々が高齢化する地域社会、多様化・高度化する地域社会など、地域社会の変化に対応しなくてはならない中で、学習センターを地域の生涯学習の拠点として位置づける。学習を支援する場としてのみならず、地域の人々の「居場所」として、学習センターが役割を果たすべく、広い視座に立って面接授業、公開講演会、研修旅行などの活動を企画するとともに、地域との連携を図るサークル活動なども支援する。さ

らに、豊かで暮らしやすい社会、多様な人々が共生できる社会の形成に取り組める地域リーダーの育成支援にも努力するなど、超高齢社会における本学学習センターの新たな役割を模索する。

II. 第2期業務運営計画（2010年4月～2016年3月）

2003年10月に新しい放送大学学園法が施行され、放送大学学園の設置形態が、特殊法人から法律に基づく特別な学校法人に移行したことにより、自主性・自律性が向上し、民間的な発想に基づく経営手法の活用による効率的な運営が求められることとなった。

このことを踏まえ、本学園は、国民の広範で多様な学習ニーズによりきめ細かに対応し生涯学習・遠隔高等教育・教養教育の中核的機関としての放送大学の役割を十分に果たしていくため、業務運営計画を策定している。

I 教育機能の強化・充実に関する事項

3. 学習センターの機能の充実

(3) 地方公共団体や関係機関等と連携しつつ、公開講演会やオープンキャンパスの開催や施設の地域開放、同窓会活動の支援等を積極的に推進することにより、地域における生涯学習拠点としての機能を充実させる。

II 業務運営の改善及び効率化に関する事項

4. 大学広報の充実と地域貢献活動の推進

(2) 学習センターを中心として、地域の生涯学習に対するニーズに適切に対応することなどにより、地域貢献活動を積極的に推進する。

III. 放送大学大学院博士後期課程設置について

放送大学は、2013年5月30日に、文部科学省に大学院博士後期課程の設置認可申請を行った。その「設置の趣旨等を記載した書類」の中で、以下の通り、地域貢献に資する人材育成の必要性が記載されている。

1. 設置の趣旨及び必要性

(1) 放送大学大学院博士後期課程教育の目的と人材養成

② 放送大学の人材養成と地域・社会貢献

—地域社会・職場等の課題に取り組む「俯瞰力を備えた高度な社会人研究者」—

1. 地域社会・職場等の現代的な諸課題の解決

(前略) 現在の日本では、現実に地域社会・職場等で生活し働く人々、つまり「社会人」が直面する諸問題をさまざまな連携と協働を通して理解し、解決していくことができる取り組みと仕組み作りが強く要請されている。同時に、そうした社会人を、高度な調査・分析力、研究力を持ち、各分野での政策立案とその実施に関わる能力を備えた人材として育成する高度な教育機会も社会的に強く求められているのである。換言すれば、現代の日本社会では、地域社会・職場等における課題解決にむけた取り

組みとそれを支える十分な俯瞰力あるいは実践力を備えた高度な社会人研究者、“新しい公共”ともいうべき地域社会・職場等の各分野における政策を担いリードしていくことのできる中核的な人材の育成が重要な課題となってきた。

放送大学では、これまでも学部と修士課程において、地域・職場等の具体的諸問題に取り組む実践的課題解決に資する能力開発と研究の機会を提供し、成果を上げてきた。その基盤の上に、博士課程を設置して地域社会・職場等の課題解決をリードする中核的な社会人研究者を育成し、質の高い地域貢献を図るものである。

(後略)

つまり、放送大学の博士課程の学生に期待されることは、まさに地域をリードする中核的な人材になることであり、質の高い地域貢献を実現することが期待されているのである。

このように、放送大学の博士課程設置構想は、設置申請過程での指摘からもうかがえるように、個々バラバラの専門教育の寄せ集めを超えた、組織としての共通理念に基づく具体的な教育、研究の実践が今後の大きな課題である。その組織的統合の理念となるのが、生涯学習・地域貢献の理念であり、放送大学の教える側の研究と学生の研究が、生涯学習・地域貢献の視点でどのように連携し、成果を出すかが今後問われることになる。

その観点から整理すると、今後の博士課程の教育においては、教員自身が生涯学習・地域貢献という視点での学生の指導であることを強く意識し、学生の問題関心をそのような博士課程の目的に結び付けて指導をしなければならない。研究面でも、自らのこれまでの専門の研究に、生涯学習・地域貢献という新たな視点を付加して、成果を上げる努力が必要だと考える。放送大学の学部を含む全教育体系において、それぞれの科目が、生涯学習・地域貢献の視点での研究の深化を反映した内容を持つものとなることが放送大学に課せられた使命ではないかと考える。

(2) 2013年の各学習センターにおける具体的な取り組み事例（学長裁量経費Ⅲ（学習センター支援）における地域貢献）（資料1参照）

第2章 地域貢献研究会のまとめ

1. 地域貢献研究会での主な議論

以上のように、放送大学では、全都道府県に学習センター等を配置し、学生の学習支援をするとともに、公開講演会の開催等を通じて、地域に根差した取り組みを行ってきた。しかし、これらの取り組みは千差万別であり、かつ各学習センターや一部の積極的な教員の活動に依存しており、放送大学として「地域を中心に位置づけた」積極的な取り組みが十分に行われてきたとは必ずしもいえない。また、放送大学における地域貢献活動とは一体どういったものを指すのかという明確な定義はなく、アクションプラン2012に基づいた各学習センターの創意工夫に応じた取り組みを相対的に地域貢献活動と位置付けてきたにすぎない。このことは、様々な「地域貢献」の解釈を生みだしてしまい、本学の地域貢献活動を語る際には、議論の食い違いが起きる可能性をはらんでいる。

そこで、本研究会では、なぜ、放送大学に地域貢献活動が必要なのか、放送大学に地域貢献を位置づける意義は何かについて整理を行い、放送大学における地域貢献とは何かについて議論を重ねてきた。

議論を進める中で、浮かび上がってきた放送大学の強みは、全国に発信できる「放送」であり、かつ全国50ヶ所ある学習センター、そして、何より学生の多くが社会人であるということである。これらの強みを活かした放送大学における地域貢献活動とは何かという観点から、議論が進んだ。

<地域貢献研究会での主な意見>

- すでに地域リーダーとして活躍されている人が放送大学の学生にもなっている。そういう方が、修士論文等を書くことが、放送大学にとって大きな地域貢献ではないか。
- 放送大学には、地方の大学が持っていない「放送」という最大の武器がある。全国に発信できる力がある。それを社会連携というテーマに対して発信できるようになった上で、地域の学習センターとタイアップして、両輪として回っていければ、他の大学にはできない新しい形の社会連携・地域貢献が見えてくるのではないか。
- 学長裁量経費で採択されたものを含めて、それぞれの学習センターが提案したものを集めて、これが地域貢献だと宣言して集める。これまでに放送大学で培ってきた事業もデータとしてまとめてはどうか。
- 大学に集積されている専門知識である「知」を地域の問題解決に役立てることを「地域貢献」といっている。地方分権を見据えて、地方分権の理念に貢献する活動が「地域貢献活動」であると考えている。放送大学の「知」は何かというと、教職員の企画力や専門知識、学生（卒業生も含む）、物的な資産、図書、放送・ネット通信網がある。それらを使っていかに地域の問題解決にあたるかということが地域貢献ではないか。

学習センターができることは、①地域のニーズをできるだけ尊重し、それに見合う貢献を行う。②教職員の企画力を活用すること。県も地元大学もやらないことを、アイデアを出して取り組む。地域の文化資源の発掘をして、市民の皆さんに伝えていく。つまり、地域資源の発掘、開発とそれを地域活性化につなげる人材の養成である。

では、本部は何をすべきか。各学習センターのケーススタディを、理論的な地域貢献の授業科目として放送を通じて、カリキュラムの中に位置づけていただければ、理論と実践の双方通行で、地域貢献をやっているとみられる。

○大学の「知」を社会に還元することは大学の「社会貢献」。センターが個別に様々な活動を行うことは、「地域貢献」。

○地域社会への貢献が地域貢献。地域社会を構成する要素は、組織・住民・自然と人工物（環境）・総体としての文化、経済等。その諸要素の現状をよりよくする様々な活動が地域貢献。多くの大学が取り組むのは、地方の企業への技術援助という組織とか経済で、大学の知を使って地域の現状を良くする取り組みであり、それには理論と実践の貢献という両面がある。放送大学でいうと、実践は学生が行っている。理論的な活動は、教育そのものであり、教養を高めること。加えて、放送大学には、放送を通じて全国の関心を持っている人に共通の知識を提供できる手段があり、全国を対象としたある種の地域貢献を実施することができ、そこに学習センターの様々な活動を通じて実践していくことが可能ではないか。

2. 放送大学にどのような地域貢献機能が必要か

このように、地域貢献研究会では様々な視点から議論を行ってきた。まず、「放送大学にどのような地域貢献機能が必要か」を考える際に意識しておくべきことは、他の国立大学法人に求められている地域貢献との違いである。放送大学と他の国立大学法人との大きく違う点は、学生の多くが社会人であることであり、すでに地域社会に根付いている人達が圧倒的多数を占めているということである。放送大学には、生涯学習の中核的役割が期待されており、大学の目的には「生涯学習機関として、広く社会人に大学教育の機会を提供すること」と書かれているように、放送大学は社会人を広く対象とした開かれた大学ということである。つまり、放送大学はもともと「社会に開かれた大学」であり、これまで行ってきた放送大学の取り組みそのものが地域との密接にかかわる活動であるといえるのである。

一方で、国立大学法人では、ある特定の地域への活動は、教員の実践への参加が前提とされており、放送大学の地域貢献の実践部分がある特定の地域に限定されてしまった場合、他の国立大学法人に匹敵するだけの成果を上げることは非常に難しい。しかし、各学習センターがもつ情報を全国的に共有し、相互の活動に横の連携を付けることができれば、その意義をより大きなものとする事ができる。放送大学の本部がその横のつながりの中心となることによって、放送大学は他の国立大学法人の持たない強み、各論的実践のみならずそれを集約し、比較検討し、体系化するという強み

を持つことができるのである。各学習センターにおける様々な個別実践活動の経験を、本部が集約し、各学習センターにおいて全国における活動の情報の共有を可能にすると同時に、そこに張り付いた教員が地域貢献の個別課題の成功・失敗事例を分析し、各センターからの相談に対する助言機能を果たし、それを個々の教員の研究に反映することができれば、放送大学の地域貢献は例を見ない、ユニークなものとなりうる可能性を秘めているのである。

また、前述の通り、放送大学の役割は生涯学習にあることは言うまでもないが、生涯学習の目的は従来の「国民一人ひとりが文化的で充実した生涯を送るための学習」から「個人の自発的な学習にとどまらず、学んだ成果を地域活動や社会参加活動に活かすこと」へと移行してきている。したがって放送大学にとって、その教育成果の出口として、地域貢献が必須であることは言うまでもない。この点において他の国立大学法人の行う地域貢献と本質的に異なる。すなわち、「地域貢献は行うことが望ましいこと」ではなく、「放送大学の存立基盤に関わること」である。

3. 放送大学における地域貢献の定義

以上の点を踏まえ、本研究会では放送大学における地域貢献を以下の通り、まとめることとする。

I. 放送大学における地域貢献とは

アクションプラン 2012 に掲げてある通り、本学の目指すべき方向は、「卓越した教育型大学」となることであり、各教員の研究成果に立脚しながら、教育を前面に打ち出した教育型大学となることが、基本的な目指す方向である。そして、大学に集積されている専門知識である「知」を地域の問題解決に役立てることこそが、まさに「地域貢献」であると考えられる。

放送大学の「知」は何かというと、教職員の企画力や専門知識、学生（卒業生も含む）、物的な資産、図書、放送・ネット通信網等様々な要素が考えられるが、それらを使っ
ていかに地域の問題解決にあたるかということが地域貢献につながるといえる。

そして、放送大学が従来より行ってきた教育事業を通して、教育や学びを通じた①地域人材の育成、及び②地域の活性化を成し遂げるといった2つの方向性こそが本学の目指すべき課題だと考えられる。

そこには、「全国に学習センターを 50 ヶ所持っている放送大学として考えること」と「それぞれの拠点になっている学習センターが考えること」の両面の課題が存在し、本部が行う放送授業と各学習センターが独自に取り組む面接授業をどう組み合わせるかということもあわせて考えていく必要がある。（資料2参照）

II. 本部の役割（使命）と学習センターに求められる地域貢献

では、本部に求められる役割と各学習センターに求められる地域貢献とは何かについて整理したい。一言で地域貢献といっても、地域貢献活動には、理論と実践の両面が存在する。「理論的な活動」とは、教育そのものであり、教養を高めることである。

加えて、放送大学には、放送を通じて全国の関心を持っている人達に共通の知識を提供できる手段があり、全国を対象としたある種の地域貢献を実施することが可能なのである。本学は、放送による授業を行うことができる日本で唯一の大学である。放送により、全国に対し一律かつ同時的に講義を提供できる点は、本学が他大学との差異性を強調する上で、一番の大きな特徴だろう。放送大学の本部に期待されている役割とは、まさにこの理論的な活動であり、放送大学における地域貢献活動を理論的に位置づけ、各学習センターの取り組みを整理し、放送等の手段を使って全国に発信していくことが求められていると考える。

一方で、「地域貢献の実践部分」は、まさに各学習センターの取り組みそのものであり、また、すでに多くの学生が実践しているのである。放送大学の学生は既に社会や地域で活躍している社会人層が大半を占めており、20歳前後の学生がほとんどを占める一般の大学とは、学生の質が大きく異なる。この特徴を強化し、地域リーダーまであと一歩のところの学生の背中を学びによって後押しすることで、地域貢献への参画へとつなげることが重要となってくるのではないかと考える。

4. 地域貢献研究会を受けた本部からの発信

(1) エキスパート科目の創設

2014年度には、地域貢献研究会の発案に基づいて、地域社会に存在する複合的な問題に取り組む人材を育成することを目的として、「地域貢献リーダー人材」認証を新設することとなった。これまでの既存プランは、特定の分野に特化した知識を提供するものであったが、本プランは、複数の分野にまたがる学際性の強い内容となっており、本学の求める地域リーダー育成の理論的な一助なることを期待して創設されたものである。本プランは、地域社会における課題に対して主体的に取り組むリーダーとなり得る人材の育成を目的とし、地域の課題解決に資する科目の学習と、課題の解決を実践する組織づくりの担い手の育成に資する科目構成を目指す。

本プランは、地域貢献研究会が責任主体となって横断的に科目の新設改廃等の検討を行っていくこととなるが、放送大学での授業体系を通じて、放送大学の教育を受けた学生が地域リーダーとして地域で活躍できる人材となる教育が行われることが必要であり、今後は「地域貢献」諸課題を対象とする科目の新設を含めた教育の充実についても検討すべき点である。(資料3参照)

(2) HPの立ち上げ

第3回地域貢献研究会での意見を踏まえて、2013年8月末に地域貢献研究会のwebサイトを立ち上げた。このwebサイトの立ち上げにより、放送大学の真の強みである全国の50ヶ所ある学習センターの取り組みを一か所に集約し、その情報を全国で共有し、相互の活動に活かしていくため、集約した情報を発信していくことが可能となる。今後は、webサイトの充実を図ることで、各学習センターでの取り組みの一助につながることを期待したい。

放送大学 30 Anniversary
学ぶ、世界が変わる。

学長メッセージ | 地域貢献への取り組み | 科目群履修認証制度 (放送大学エキスパート) | 面接授業 (スクーリング) | 研究会構成員

平成26年度は、以下の学習センターでの地域貢献プロジェクトを、学長裁量経費にて実施します。

近畿地方

- > 近畿ブロック [報告](#)
- > 奈良学習センター [更新](#)
- > 和歌山学習センター

中国地方

- > 岡山学習センター [更新](#)
- > 山口学習センター [報告](#)

九州・沖縄地方

- > 九州・沖縄ブロック [更新](#)
- > 熊本学習センター
- > 鹿児島学習センター [報告](#)

北陸・甲信越地方

- > 富山学習センター [報告](#)
- > 福井学習センター [報告](#)

北海道・東北地方

- > 北海道学習センター [更新](#)
- > 岩手学習センター [報告](#)
- > 山形学習センター

関東地方

- > 埼玉学習センター [更新](#)
- > 千葉学習センター
- > 東京文京学習センター
- > 東京多摩学習センター [更新](#)

四国地方

- > 香川学習センター
- > 高知学習センター [報告](#)

東海地方

- > 岐阜学習センター
- > 静岡学習センター [報告](#)



● 学習センター ○ サテライトスペース



PAGE TOP

信頼済みサイト 100%

第3章 放送大学における地域貢献の推進に向けて（今後の課題と方向性）

1. 予算

2013年度においては、アクションプラン 2012 に掲げられた「学習センターの地域リーダー育成支援と地域貢献」の実現に向けて、学長裁量経費Ⅲ（学習センター支援）での支援を行ってきた。しかし、2014年度からは、本学の発展に寄与すると考えられる教育上あるいは大学運営上で評価しうるプロジェクトに対し、資金的に支援することを目的とした、学長裁量経費Ⅰ（プロジェクト支援）の中で、支援をしていくこととなった。このことにより、これまでは学習センター単位でしか申請ができなかったが、本部の教職員まで、応募が可能となるため、全学的に地域貢献活動の取り組みを進めていくことが期待される。

2. 組織体制及び事務体制

以上のように、放送大学において、地域貢献を推進していくことは、大学としてのミッションである。資料1の学長裁量経費によるプロジェクト報告書を見ても明らかのように、放送大学では、これまでも地域と密接にかかわった多くの取り組みを行っている。そのため、放送大学が今後、地域貢献活動を推進していくため必要なことは、具体的な事例の「集約」であり、それを踏まえた課題整理及び分析といった「体系化」の作業であり、そして、全国50ヶ所ある各学習センターにその情報を「共有」していくといった一連の流れである。このことは、アクションプラン 2010 にもある通り、「放送大学は、学習者が社会の中で蓄積してきた「経験」と、学問が研鑽してきた「知識」とを、互いにフィードバックをかけることによって融合させ、新しい教養の知識体系を構築することによって、知識循環型の高等教育機関を目指す」ことに通ずるものである。このように、地域貢献活動の実践によって、学習者の経験と学問の知識を融合させる「知識循環のプラットフォーム（共通基盤）」としての高等教育機関を実現することが可能になると考える。放送大学による意識的・組織的・継続的地域貢献の実施が放送大学の更なる発展に大きく寄与すると考える。

そのためには、事務組織体制のバックアップは必要不可欠である。まさに、情報の「集約」、「体系化」、「共有」といった一連の流れを遂行していくためには、情報の分析が必要であり、教員と事務局が一体となった取り組みが不可欠である。今後、放送大学の強みを活かす戦略を描き、その実現に向けた本部と各学習センターの連携や積極的な情報発信をしていくためには、地域貢献の諸課題を中心に担当する事務局の整備もあわせて検討を行っていくことが必要である。

3. まとめ

以上のように、地域貢献活動を放送大学の中核においた取り組みとして推進し、本研究会の提言内容が具体的にかつ継続的に実行されるように、引き続き検討を行っていく必要がある。しかし、放送大学では、地域貢献研究会の設置を契機に、地域貢献活動の議論を加速させてきたものの、地域貢献研究会は2012年11月に設置されて以降、5回の開催にとどまっており、さらなる実績を積み、放送大学における地域貢献について先導的役割を果たしていくことが求められる。そのため、2014年度においても地域貢献研究会が中心となった地域貢献の諸課題について議論を進めていくこととする。

これらを踏まえ、2014年度以降議論していくべき事項については、以下の通りまとめることとする。

- ① 第2章4.(1)にある通り、2014年度から「地域貢献リーダー人材」認証を新設することとしているが、地域貢献研究会が責任主体となって横断的に科目の新設改廃等の検討を行っていくことになっている。そのため、来年度においては、地域貢献研究会がエキスパート科目を含めた、放送大学における地域貢献の推進役としての役割が期待されるため、2014年度においては、引き続き、地域貢献研究会が主体となった議論を進めていく。
- ② 引き続き、学長裁量経費により地域貢献活動を予算的に支援する環境を作り、それらを中心とした事例を収集することで、放送大学地域貢献 web サイトの充実を図る。
- ③ 今後の教員における取り組みとして考えられる例としては、地域貢献研究会の構成員である専任教員が主体となり、学長裁量経費 I (プロジェクト支援) での予算獲得を目指しつつ、放送大学における地域貢献のモデルケースを確立できるように検討を進めることも一つの方策であると考えられる。

資料 1

各学習センター実施の地域貢献プロジェクト 報告書

北海道学習センター

岩手学習センター

山形学習センター

埼玉学習センター

千葉学習センター

東京文京学習センター

東京多摩学習センター

富山学習センター

福井学習センター

岐阜学習センター

静岡学習センター

近畿ブロックの学習センター

奈良学習センター

和歌山学習センター

岡山学習センター

山口学習センター

香川学習センター

高知学習センター

九州・沖縄ブロックの学習センター

熊本学習センター

鹿児島学習センター

(ウェブサイト：<http://www.ouj.ac.jp/pj/> より)

北海道学習センター	URL : http://www.sc.ouj.ac.jp/center/hokkaido/
プロジェクト名：地域活性化活動の広報と実践プロジェクト	
1. プロジェクト概要	
<p>テーマは「地域主義」。</p> <p>北海道学習センターの学生が、道内の地域活性化活動に従事している人々に、彼らの活動理念・取り組む課題・活動内容・将来展望等についてインタビューを行う。</p> <p>調査するのは、北海道にとって喫緊の課題である「食・農業」「流通」「観光」「在宅医療・訪問看護」の4つの分野について行う。このインタビューは、コミュニティFM（FM三角山放送局）の30分番組として8回にわたって放送する。学生が、自らの手でこれらの企画一聞き取り調査の具体的な領域ならびに対象者、インタビュー項目、メディアを通じて広報すべき事項等一を立てて実践することは、地域社会貢献の意識向上及び地域リーダーの育成への堅牢な基盤となるものと考え。</p> <p>【番組内容】</p> <p>日時： 1. 11月5日（火）9：30～10：00 （再放送：同日夜20：30～21：00。以下同じ。） 「観光～ふらのまちづくり株式会社 西本伸顕社長のインタビュー前編」</p> <p>2. 11月12日（火）9：30～10：00 「観光～ふらのまちづくり株式会社 西本伸顕社長のインタビュー後編」</p> <p>3. 11月19日（火）9：30～10：00 「在宅医療・訪問看護～旭町医院 堀元進院長のインタビュー前編」</p> <p>4. 11月26日（火）9：30～10：00 「在宅医療・訪問看護～旭町医院 堀元進院長のインタビュー後編」</p> <p>5. 12月3日（火）9：30～10：00 「産業～株式会社エコノス 長谷川勝也社長のインタビュー前編」</p> <p>6. 12月10日（火）9：30～10：00 「産業～株式会社エコノス 長谷川勝也社長のインタビュー後編」</p> <p>7. 12月17日（火）9：30～10：00 「食・農業～押谷農園 押谷行彦氏のインタビュー前編」</p> <p>8. 12月24日（火）9：30～10：00 「食・農業～押谷農園 押谷行彦氏のインタビュー後編」</p> <p>番組： 三角山放送局（76.2MHz）『みらい発見・北海道～地域リーダー4人からの伝言』</p> <p>* 関連ウェブサイトURL URL : http://www.sc.ouj.ac.jp/center/hokkaido/</p> <p>* 実施体制（主催、共催、後援等） 主催／北海道学習センター</p> <p>* 事務局体制（人数等） 北海道学習センター所長、事務長、職員2名</p>	
2. プロジェクトの成果	
<p>当プロジェクトは『アクションプラン2012』の指針に沿って、地域リーダー育成支援及び地域貢献の推進を目的として企画したものであり、インタビューの構成から実施に至るまで全て学生グループが担当し、現在地域社会が抱える様々な課題に対して主体的に取り組んだことにより、地域リーダー育成へと繋がるものになったと思われる。</p> <p>また、親しみやすい課題をテーマとし、コミュニティFMの番組として提供したことにより、聴取者である地域住民も改めて、地域貢献の意義について、意識する契機となったと同時に身近な生涯学習機関として放送大学の認知度向上にもつながったものと思われる。</p>	
3. プロジェクトの課題	

今回は学生のインタビューという形式をとったため、参加することができた学生は少数であったが、このプロジェクトをきっかけに他の学生も地域社会貢献に興味をもち、意識向上につながっていくことを期待している。

4. 今後の展開計画

今回の番組内容と調査内容はさらに整理加筆を重ねた上で、録音・録画資料と合わせて、次年度に北海道学習センターが行う「学生参加型面接授業」の資料教材とすることを予定している。

5. 参加者の感想

本プロジェクトは、各世代の学生がチームを組み、構成の指導を受けた上で地域リーダーにインタビューをし、さらにコミュニティFMで発信するという、単なる双方向コミュニケーションを超えた壮大な企画であった。

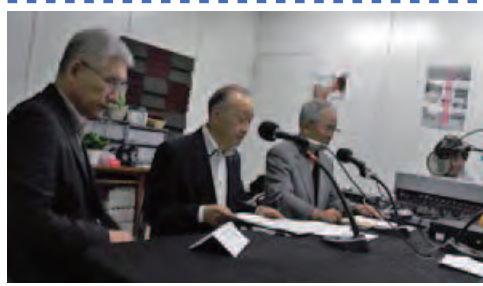
発信する側は、事前調査をし、正確に伝えることを重視しながら、地域を担うリーダーが発する問題を提起する。受信する側は、受け止める事が外刺激になり、内省し、学習目標を振り返るきっかけになったであろう。学生たちにとっては今後の学習意欲につながる、懐の深い夢のある企画であった。放送を聞き「私だったらこうするのに」と感じる学生がいたら成功かもしれない。

関わったすべての人に感謝申し上げたい。

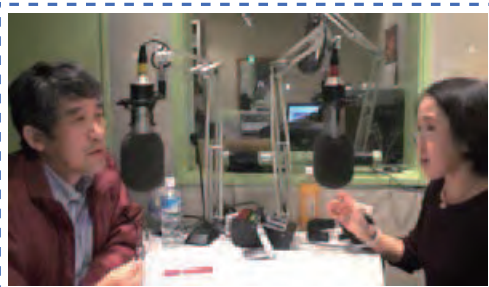
6. 写真



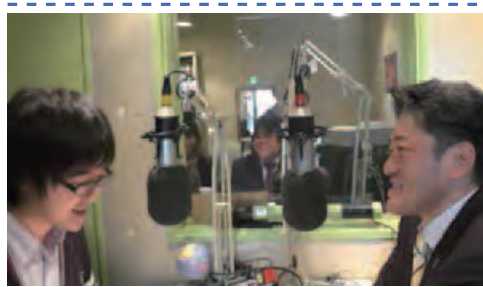
観光一収録風景 1



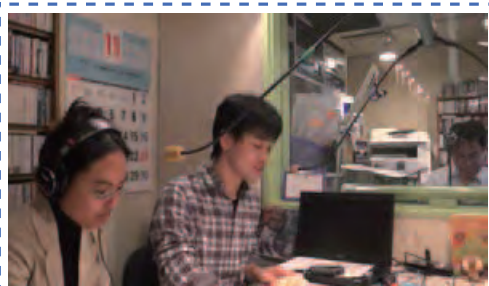
観光一収録風景 2



在宅医療・訪問看護一収録風景



産業一収録風景



食・農業一収録風景

プロジェクト名：被災地復興を考える現地視察型研修 ～地域貢献、私たちが伝えるべきこと～

1. プロジェクト概要

震災を経験した私たちが地域のためになすべきことの一つに、被災地の現状や震災から学んだ教訓を、多くの人々や次世代に広く伝えていく使命がある。震災から2年が経過した今、復興が進まずに仮設住宅等で暮らす人々がいる一方で、内陸に暮らす人々の意識は徐々に薄れている現実がある。そこで、震災・復興・防災に関する知識を専門家からセミナーで学ぶとともに被災地を実際に訪れ、現状把握と同時に現状を伝える使命、そして自分にできる復興支援を考える契機を提供し、地域貢献につなげる。研修は、初日にセミナー、2日目に被災地（9/8：陸前高田市・大船渡市・釜石市編、9/22：釜石市・大槌町・山田町・宮古市編）を訪問する。

[被災地復興を考える現地視察型研修](#)

- * 実施体制（主催、共催、後援等） 岩手学習センター
- * 事務局体制（人数等） 所長、事務長、職員2名 計4名



 [チラシPDF](#)

2. プロジェクトの成果

本研修には、これまで被災地を訪れる気持ちになれなかったという者、現在もボランティアを続けている者、実際に家族を失った者など、2回の研修で延べ54名の学生が参加した。初日のセミナーを受講した後、2日目の被災地では、崩壊した街の様子、復興が進まない状況を体感するとともに、遺族や被災住民の話などに耳を傾け、メディアでは伝えきれていない現状を知ることができた。研修の最後には、研修で学んだことや自分ができる復興支援についての発表等が行われ、現地に来て初めて正しい理解ができたという感想から、地域に戻って町内会などで話し合い防災等に活かしていきたいといった意見なども話され、地域貢献につながる成果があった。

3. プロジェクトの課題

被災地への訪問は、日程調整が困難であり、日程の確定が遅くなったことで、違う日なら参加したかったという学生が多かった。また、現地でのより多くの被災者からの話を聞きたいという要望もあったが、その調整は非常に困難といえる。

4. 今後の展開計画

被災地の復興は、まだまだ課題が山積みである。本プロジェクトは地域貢献型であり、継続性が重要である。今後も定期的にセミナーなどを開催するとともに、県外参加者を募り、被災地や被災県の状況を広く広めていきたい。

5. 参加者の感想

初日、齋藤所長から講義を受け、次の日に現地視察という段取りで行われた。現地でも、日頃から復興活動に携わっている所長の案内で各地域を巡ることになったが、以前は人家や商店が立ち並んでいたところが、2年を経た今でも全て野原になっていて、案内がないと震災前の姿が想像できないほどだった。実際に津波襲来現場に立って周りを見ていたら、ここで今本当に津波が来たらどうしよう・・・という恐怖を感じた。差し迫った中で、冷静に判断して逃げ道を見つけられただろうか、と、とても不安になった。この怖さを含めた経験を、帰ったら家族や知り合いに伝え、地域の中でも実際に災害が起きた時どうすればいいのかみんなと一緒に考える機会をつくりたい。

プロジェクト名 : “国宝「縄文女神」を生んだ基層文化を考える”「山形の縄文フォーラム」

1. プロジェクト概要

○開催趣旨

平成24年、舟形町西ノ前遺跡出土土偶が日本の縄文文化を代表するものとして「国宝」に指定された。国宝「土偶」を生んだ縄文文化は一万年以上もの長い間続き、自然と共生した社会で現在の山形の基層文化を形成しているとされる。そして、縄文時代は近年の山形各地の発掘調査により新しい事実が明らかとなっている。そこで、「今、国宝「縄文女神」を生んだ山形の縄文時代はどこまでわかったのか」をテーマに山形県埋蔵文化財センターと連携し、放送大学開学30周年記念事業として最新の縄文遺跡発掘調査の成果をもとに縄文文化を考える「縄文フォーラム」を、山形県民の縄文文化について理解を深めるために開催したものである。

○主催

放送大学山形学習センター

○共催と後援

共催 : 山形県埋蔵文化財センター、放送大学山形同窓会、ゆうがくの会

後援 : 山形考古学会、うきたむ考古の会

○日時

平成26年2月16日(日)午前10時～午後5時

○会場

山形市保健センター大会議室(霞城セントラル3階と1階アトリウム)

○内容と参加者 118名参加

(1) 講演会と特別報告 10時10分～12時

①講演会 10時10分～11時10分

山形県立うきたむ考古資料館名誉館長 川崎利夫氏

「山形の大地に花開いた縄文文化」

②特別報告 11時10分～12時

県埋蔵文化財センター西ノ前遺跡調査主任 黒坂雅人氏

「国宝「縄文土偶」を出土した西の前縄文ムラの発掘」

(2) 報告 12:50～15:45

○日本考古学協会員・山形県埋蔵文化財センター 水戸部秀樹氏

「白龍湖畔の押出縄文ムラにみる縄文人の暮らし」

○日本考古学協会員・山形県埋蔵文化財センター 菅原哲文氏

「山形の発達した縄文中期ムラのように」

○第13回尖石縄文文化賞受賞者・山形県埋蔵文化財センター 小林圭一氏

「東北に栄えた亀ヶ岡式縄文ムラ」

○日本考古学協会員・山形県埋蔵文化財センター 植松暁彦氏

「縄文文化から弥生文化へ」

(3) 全体討議 16:00～17:00

○山形県埋蔵文化財センター出前縄文イベント 25名参加

霞城セントラルアトリウムで、山形県埋蔵文化財センター出前イベントとして石器作り実演、まが玉作り体験、アンギン編み体験を実施し縄文土器を展示した。

2. プロジェクトの成果

今回の縄文フォーラムの講演と報告には118名の参加者があり盛況で、国宝「縄文の女神」への県民の関心の高さがうかがえた。講演と報告内容は当日発刊した小論集を資料として使用し、それをもとに縄文時代の魅力や最新の成果を述べたもので、参加者の山形の縄文文化の理解に役立ったと思われる。また、縄文フォーラムチラシの公的機関での配架や縄文フォーラムの朝日新聞広告を通じて、放送大学の認知度向上にも寄与したと考えられる。

3. プロジェクトの課題

縄文フォーラムのなかで行った山形県埋蔵文化財センター出前縄文イベントは、雪の影響もあって参加者が少なかった。事前に、できる範囲で小・中学校などへの訪問広報等を行っていれば、もっと参加者が増えたのではなかったかと思われる。

4. 今後の展開計画

今回のプロジェクト開催を契機に、それを引き継ぐ形で、平成26年度第2学期に北海道・東北ブロック学習センターの「北の古代史を知る」統一テーマでの連携面接授業の一つとして「国宝「縄文女神」を生んだ時代を掘る」を実施することとしている。

5. 参加者の感想

このたび、「山形の縄文フォーラム」に参加した。約一万年続いた縄文時代は、東北地方が日本列島の中心として動いていたことに感動する。弥生時代に米づくりが始まりそれから約二千年、東日本から西日本へと日本の流れが移った。鉄が大陸から西日本に伝わって、米作りが始まり、富の蓄積ができるようになって身分の上下が生じ、より豊かさを求めて現在へと続いているのだろう。

縄文時代は共生、共助の時代だったと思われる。土器、石器製作等にみられる手職のすばらしさ。当然、木器、骨角器も優れた製品を作りだしたことだろう。また、西海淵遺跡や押出遺跡等でみられる住居跡、集会所、作業場、貯蔵穴等の配置は現在の都市計画を思わせる。西の前遺跡の縄文の女神の出土から明らかになったように敬虔な祈りの後、鎮魂の場所が廃棄場所に使用されており、ゴミ捨て場さえ用途別に区別されていたのではないかと想像させた。

このような縄文の世界を復元できる遺跡群が山形県に多く存することは、我がふるさとの現在を新たな視点で見直すきっかけとなるような感じをうけた。山形県の基層文化を覗くような今回のフォーラムであった。

6. 写真



川崎利夫氏講演の様子



水戸部秀樹氏報告の様子



全体討議の様子



報告を聞く参加者



縄文イベントの様子



受付を担当した同窓会役員

[▲ページの先頭へ](#)

埼玉学習センター	URL : http://www.sc.ouj.ac.jp/center/saitama/
プロジェクト名 : 秩父ジオパーク・ボランティアガイド養成講座	
1. プロジェクト概要	
<p>埼玉県秩父地域は2011年に全国で15番目の日本ジオパークに認定された。秩父には秩父34カ所観音霊場があり、これらを巡礼する札所巡りの人びと、そして三峯神社参詣の人びとが多かったが、秩父ジオパークが認定されたことにより、秩父地域を訪れる観光客も増加している。そこで、これらの観光客に秩父ジオパークに含まれている特徴的なジオサイトで実際に観光客に説明するガイド養成講座(定員15名)を開講する。 講師:吉田健一氏(埼玉学習センターの面接授業「秩父の自然と風土」の担当者)</p> <p>* 関連ウェブサイトURL http://www.chichibu-geo.com/ (秩父まるごとジオパーク推進協議会事務局)</p> <p>* 実施体制(主催、共催、後援等) 主催:埼玉学習センター 協力:秩父市教育委員会、秩父市産業観光部観光課</p> <p>* 事務局体制(人数等) 所長、事務長、職員2名 計4名</p>	
2. プロジェクトの成果	
<p>秩父ジオパーク・ボランティアガイド養成講座は、当初10月26日(土)、27日(日)に予定されていたが、26日15名、27日17名の申込者があったが、台風27号が関東地方に接近するという情報があったので、延期して12月7日(土)、8日(日)に実施した。ところが、12月の寒い時期に実施となったために講座申込者が減少して、7日8名、8日8名となってしまった。</p> <p>この秩父ジオパーク・ボランティアガイド養成講座への実施に際しては、秩父市教育委員会と秩父市産業観光部観光課の協力を得た。</p> <p>12月7日(土)「秩父盆地の東(変成岩)から中央(新第三紀の地層)を巡る」 10:00 西武秩父駅集合・出発→美の山展望台(秩父ジオパークの展望)→日本一の板石塔婆・寛保の洪水位を記録した磨崖標→昼食→親鼻橋(紅簾石片岩・ポットホール)→太田地区(上流切断河川をつくる「米どころ」・桜ヶ丘集落遠望)→取方(海底地すべりの跡・地層の褶曲)→おがの化石館・日本の地質百選「ようばけ」・宮沢賢治の足跡→札所32番法性寺(風化現象タフォニ)→西武秩父駅到着(16:30)、希望者は秩父ミュージアムパーク・スポーツの森コテージ宿泊</p> <p>12月8日(日)「秩父盆地の中の地形(河成段丘)と暮らしを見る」 9:30 西武秩父駅集合・出発→ミュージアムパーク(秩父市街地展望台)→円福寺(米どころ蒔田の谷の暮らし)→聖神社(聖神社と和銅遺跡)→札所4番金昌寺(石仏と盆地東側の境界)→昼食→ふるさと館と買継商通り(絹取引の暮らし)→秩父神社・秩父まつり会館→羊山公園(中段段丘)から市街地展望→芝桜の丘→寺坂の棚田→西武秩父駅到着・解散(16:00)</p>	
3. プロジェクトの課題	
<p>今年度実施したボランティアガイド養成講座は、台風27号が接近しているという理由で、予定していた日程を2日前に急遽延期し、秩父地域が寒くなる12月7日(土)・8日(日)に実施した。そのために参加人数は募集人数に達しなかった。もう少し暖かい時期に実施すればもっと多くの参加者が見込まれると思う。</p> <p>また、今回はボランティアガイド養成講座を秩父市教育委員会と秩父市産業観光部観光課の協力を得て実施したが、秩父市民の参加が少なかったため、次回は一般市民の参加者が増加するように募集活動を積極的に行う必要がある。</p>	
4. 今後の展開計画	
秩父ジオパークに含まれるジオサイトは多数あり、今回のボランティアガイド養成講座で実際に見学したのは	

限られた場所だけである。今後は、これらの場所に詳しい、地元の人を講師にして、秩父の土地と人びとの暮らしの関係を理解して、説明できるボランティアガイド養成講座を継続していきたいと考えている。

5. 参加者の感想

ジオサイトの特徴を地質学の視点で説明するのは一般的な方法であるが、今回のボランティアガイド養成講座では、ジオサイトだけではなく、特定の場所の特性と歴史との関係まで説明してもらって、大地と人びとの暮らしにまで興味・関心が広がるようになった。秩父市の「秩父まるごとジオパーク推進協議会」と秩父市の観光課の関係が中心になってジオパークの宣伝活動をしているので、このボランティアガイド養成講座を受けて、少しでも秩父ジオパークの宣伝に役立ちたい。「秩父ジオパーク・ボランティアガイド養成講座」という名称であったので、これを受講するとボランティアガイドをやらなければならないという義務を感じてしまう。

6. 写真



写真1 美の山から秩父盆地の展望



写真2 親鼻橋近くのポットホール



写真3 ようばけと宮沢賢治の歌碑



写真4 ミューズパークの展望台から秩父市街地を望む



写真5 聖神社と和同開珎の碑



写真6 武甲山と寺坂の棚田

プロジェクト名：千葉学習センター学生と地域社会の幅広い世代との相互交流促進プロジェクト

1. プロジェクト概要

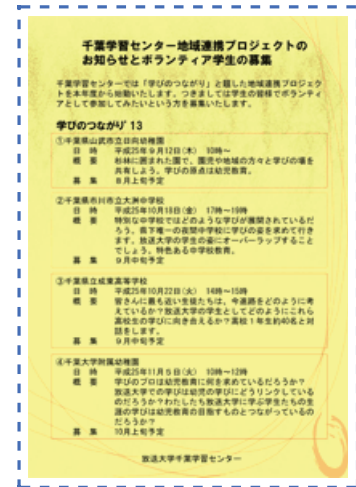
テーマ：学びのつながり'13

千葉学習センターの学生が地域の各種学校等に直接出向き、生徒やPTAを含む幅広い地域の人々と、世代を越えて、学習センターの活動や学生個々の生き方について対話する機会を実現する。

また、本学習センターにおける「秋祭り」など既存の催しにこれら地域の人々が参加する機会を設けるなど、双方向の交流を実現する。このことにより、地域との連携を密にし、学習センター機能の充実を図るものである。具体的には、25年度～26年度の2年間で以下の計画を実行する。

1年目（準備段階）：

近隣の教育委員会、校長会等と千葉学習センター所長、事務長、学生サポーター、サークル代表等との企画会議を設け、具体案を検討する。



チラシPDF

(1) 出前（案）：千葉学習センター学生の講話、対話式の質問コーナー、千葉学習センター合唱サークル・学園本部合唱団との連携による歌声広場など

実施日：9月12日（木）、10月18日（金）、10月22日（火）、11月5日（火）

(2) 学習センターへの招待（案）：25年度千葉学習センター「秋祭り」に放送大学30周年協賛企画として、先方の生徒、PTA等の参加企画を実施する。

実施日：10月13日（日）

2年目（企画の実施段階）：

年4回程度、住民の多い地域（千葉市、船橋市、市川市、習志野市、浦安市、佐倉市、八千代市等を想定）の各種学校等に千葉学習センターの学生、教職員が直接出向き、交流活動を実施するとともに、26年度「秋祭り」への先方の参加を継続する。

*実施体制（主催、共催、後援等） 主催／放送大学千葉学習センター
共催／千葉県山武市立日向幼稚園、市川市立大洲中学校、千葉県立成東高等学校、千葉大学教育学部附属幼稚園

*事務局体制（人数等） 事務長、総務係長、総務係・教務係3名

2. プロジェクトの成果

9月12日（木）：千葉県山武市立日向幼稚園の祖父母参観に所長、事務長、放送大学生9名が参加し、園児や祖父母と合唱、ペープサート、折り紙、竹トンボ、放送大学紹介などにより相互に親睦・交流を行った。

10月13日（日）：千葉学習センター秋祭り（文化祭）に、地域の合唱団（佐倉ジュニア合唱団、浦安男性合唱団、市川市立第五中学校合唱部&合唱団ノア）を招き、千葉学習センター合唱サークル&放唱会（放送大学学園職員合唱部）とともにコーラスの発表企画を行った。また、祖父母参観で交流した日向幼稚園長を招待し、各サークルの催しを見学いただいた。

10月18日（金）：千葉縣市川市立大洲中学校との交流会に所長、事務長、総務係長、放送大学生14名が

参加し、放送大学の紹介や講話、合唱、折り紙キュービック（四字熟語、慣用句）、マジック披露など大洲中学校の夜間学級生約30名と親睦・交流を行った。

10月22日（火）：千葉県立成東高等学校の職業研究講演会に事務長、元東京都庁職員の放送大学生1名が参加し、時事通信社編集局長、三井物産社員、両総観光社長、ウェザーニューズ副社長ら8名の講師とともに、放送大学の紹介や「学びと仕事」と題して東京都庁における経験談、仕事を進める上での姿勢や行動基準について、高校1年生約40名に対し講演・対話を行った。

11月5日（火）：千葉大学教育学部附属幼稚園に所長、事務長、放送大学生7名が出向き、園児の活動観察や幼児の保育教育に関して副園長と対話を行った。

それぞれの交流により、放送大学の認知度を高めることができた。また、園児、中学生、高校生、祖父母と放送大学生が直接触れ合い、対話することによって放送大学生の学びに対する姿勢や生き方を伝え、地域住民の考え方を学ぶことができ、有意義な地域貢献活動となった。

3. プロジェクトの課題

短期間に複数の学校との交流を集中的に行ったことから、日程調整、参加学生の募集、打ち合わせなどに多大な労力を要した。本プロジェクトは2年計画のため、次年度は計画時に日程・期間のバランスを考慮したい。また、地域貢献活動は、継続性が重要であるため、継続的な経費支援が望まれる。

4. 今後の展開計画

来年度は、本年度交流した学校との企画を継続するとともに、新たに、過疎により限界集落となった福島県昭和村と、学生による合唱企画や、千葉市も昭和村も縄文土器が出土することから縄文文化研究を通じた「村興し交流」などを計画している。

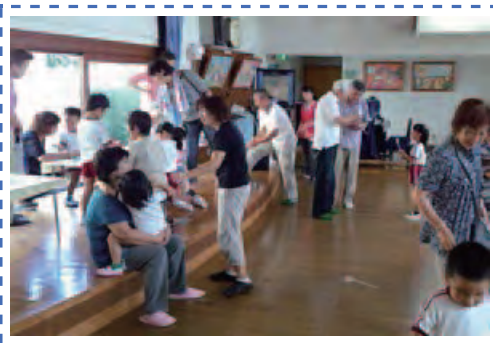
5. 参加者の感想

「学びのつながり」という題に魅了されて、可能な限り企画に参加した。訪問先の子供たちや生徒を中心として、地域の教職員や親や祖父母と幅広い世代との出会いを得られた。特に、千葉学習センターの学生たちとの新たな出会いの輪を強く感じられた。通常の仲間とは違う輪の中で、折り紙、竹からの竹とんぼづくり、ペーパークラフト作りなどの準備の中で、新たな学生同士のつながりができた。そしてさらに訪問先の地域の方々とも一体となり、楽しい学びの時と場を共有できた。中には母校との再会を果たした学生もいた。地域の方々とのこうしたつながりは、時を経た今も思い出に残る。人と人のつながりにまで発展できた「学びのつながり」は放送大学の存在を地域に発信できる、良い企画であると感じた。また参加できた幸せを感じた。

6. 写真



交流風景（1）
～折り紙づくり～



交流風景（2）
～竹トンボ～



交流風景（3）
～センター参加者による歌のプレゼント～



学習センター学生・職員によるマジックショー



グループ作業風景



成東高校職業研究講演会での講話風景



千葉大学教育学部附属幼稚園



園庭での活動観察（1）



園庭での活動観察（2）



副園長との対話風景

[▲ページの先頭へ](#)

プロジェクト名：地域貢献プロジェクト「生涯学習拠点への取り組み」

1. プロジェクト概要

地域貢献を目指した特別公開講演会の実施と協賛イベントを企画立案し、放送大学東京文京学習センターが地域の生涯学習拠点としての位置づけを示す。文京区ゆかりの人物「徳川慶喜」没後100周年記念事業に協賛し講演会を企画。文京学習センターと文京区が連携し文京に生まれ文京に没した十五代将軍徳川慶喜公とその時代を描き出すための特別講演会を文京学習センターで実施。更に、協賛イベントとして、徳川慶喜の生きた幕末明治を時代背景とした放送大学附属図書館所蔵ちりめん本・古写真コレクション展「日本残像」を同時期に開催。同時にちりめん本に関連する講演会を企画実施する。

* 関連ウェブサイトURL

放送大学のホームページ「特別講演会のご案内」



チラシPDF

* 実施体制（主催、共催、後援等）

文京区後援

* 事務局体制（人数等）

岡野所長・馬場事務長

2. プロジェクトの成果

11月3日（日）徳川慶喜関連講演会「奥医師坪井信良の手紙にみる幕府崩壊前後の徳川慶喜」を文京学習センター多目的講義室1で開催した。地域住民に対してのチラシ配布や自治体広報物などの告知効果により文京区民を中心とし240名が参加。更に11月5日（火）～10（日）協賛イベントとして附属図書館所蔵ちりめん本・古写真コレクション展「日本残像」を文京学習センター学生ホール、講義室2で開催し連日多くの市民や学生で賑わった。（ちりめん本展示会場には1,130名の来場者があった。）11月5日（火）「学校と書物が来た道」は93名の参加者、11月10日（日）「ちりめん本の生まれた時代と明治の印刷事情」は104名の参加者があり、東京文京学習センターを拠点とした地域生涯学習への取り組みが出来た。

3. プロジェクトの課題

各講演会で参加者に対しアンケートを実施。講演会の感想や放送大学に期待していること、放送大学への入学を希望しているか等の設問を設けた。アンケート回答者のうち入学検討者38名に対し募集要項を送付することができ、放送大学と地域社会がますます深く関わってゆく切っ掛けになったと思う。今後の課題として単発ではなく継続した地域貢献への取り組みが更に必要と思われる。

4. 今後の展開計画

今回は地域自治体である文京区と連携した取り組みが出来た。また文京区を中心とした地域貢献も行うことが出来た。今後も文京区と様々な情報交換をしながら連携を強化し地域貢献してゆきたい。

5. 参加者の感想

徳川慶喜関連の講演会「奥医師坪井信良の手紙にみる幕府崩壊前後の徳川慶喜」に参加してみて、このような手紙が現存していることは全く知らなかったし、難解な言葉をわかりやすく解説してくれてとても良かった。また講師の先生の張りのある声とキャラクターが良く伝わった。講義全体の時間設定が細切れ過ぎて、本来の「幕末崩壊前後」にもう少し時間をかけて説明してもらいたかった。また質問ももう少し多く時間を取っても

らいたかった。折角興味深い視点から慶喜を観察しているし、当時の時代の庶民の生活などの分析も出来れば伺いたかった。

6. 写真



樺山印刷博物館館長



徳川慶喜講演会 2



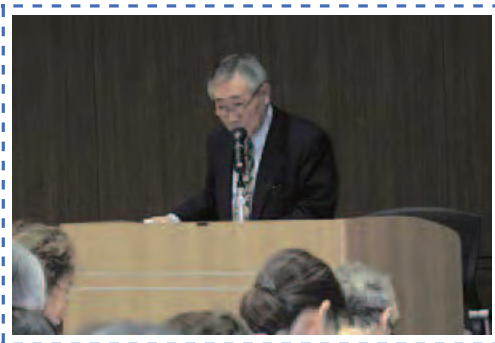
山口先生講演会



樺山先生講演会



徳川慶喜講演会 1



徳川慶喜講演会 3



徳川慶喜講演会 4



日本残像 1



日本残像 2



日本残像 3

[▲ページの先頭へ](#)

プロジェクト名：認知度向上プロジェクト連続講演会「多摩を学ぶⅡ-自然・文化・暮らし」

1. プロジェクト概要

昨年度の連続公開講演会「多摩を学ぶ-自然・文化・暮らし-」が好評で、継続と広報の充実を求める声が多かったので、今年度は「玉川上水のあとさき-多摩の暮らしと景観-」、「多摩の方言」、「江戸の人びとの行楽行動-武蔵野への旅-」、「多摩の縄文・弥生時代」、「多摩の植生とその保全」、「多摩のインフラ整備-鉄道・電気・水道-」のテーマで、自然・文化・暮らしに光をあてた。

本企画は主な狙いを、

- 1) 多摩全体を扱って各自治体の企画と差別化する
- 2) 豊かな地域理解を身につけた地域リーダーの育成に資する
- 3) 面接授業での地域学の充実につなげる
- 4) SCの認知度を向上させる

におき、多摩地区のタウン紙に広告を掲載するなど、宣伝・広告の充実を図った。



チラシPDF

* 実施体制（主催、共催、後援等）

当センター単独で実施した。

* 事務局体制（人数等）

特別の体制は組まず、所長・客員教員・事務職員で分担しながら遂行した。

2. プロジェクトの成果

本プロジェクトの目的として、

- 1) 多摩全体を扱って各自治体の企画と差別化する
- 2) 豊かな地域理解を身につけた地域リーダーの育成に資する
- 3) 面接授業での地域学の充実につなげる
- 4) SCの認知度を向上させる

の4点を掲げたが、

- 1) は企画段階で留意し、講演内容はいずれも目的に適合的であった
- 2) は参加者のアンケートでも予期した効果のあったことが確かめられた。また個人だけでなく、学生サークルの活動にも効果が及び活性化につながっている
- 3) については再来年度以降に具体化できる面接授業科目の候補が誕生している
- 4) は、タウン紙への広告掲載が宣伝効果の大きいことが確かめられた

3. プロジェクトの課題

今後の課題として、

- 1) 引き続き講演会の宣伝・広告の手法を工夫
 - 2) 講演会の成果をSCの認知度向上と学生増につなげる方策についてさらに検討を進め、その具体化に取り組む
 - 3) 公開講演会全般の実施体制の強化を図る
- の3点がとくに重要と考える。

4. 今後の展開計画

本プロジェクトは昨年度の連続公開講演会「多摩を学ぶ」の続編として企画したが、来年度については年度明

け早々に結論を出したい。また本プロジェクトの講演内容を引き継いだ地域学の面接授業を再来年度以降に開講して、SCの社会的な使命に応えていく計画である。

5. 参加者の感想

「永く住むこの街について何も知らないなあ！」退職してのある日、ふとそんな思いが胸をよぎりました。そんなときに、「多摩を学ぶⅡ」を知り、渡りに船、受講料無料、すぐに受講しました。素晴らしい講座が続く中、いくつか印象深い講義があります。

「玉川上水のあとさき」で、多摩の発展はまさに玉川上水の賜物と知りました。

「多摩の方言」では、山の手と多摩の「言葉」の違いに驚きました。

「多摩の縄文・弥生時代」では、この地の古い歴史の重みを感じました。

「多摩の植生とその保存」で、かけがいのない緑を保存する重要さを痛感しました。受講して、自から勉強してみたい思いが募り、現在、雑駁で遅速ながら実践しています。大きな喜びです。

[▲ページの先頭へ](#)

プロジェクト名：地域のNPO法人等と連携した放送大学創立30周年記念「富山健康セミナー」の開催

1. プロジェクト概要

 [開催リーフレット](#)

富山県は300年以上前の江戸時代から配置売薬業が栄え、今日の富山県産業の基盤となっており（平成23年の医薬品生産金額全国第3位で人口当たりでは第1位）、富山県と薬とは切っても切れない深い関係がある。このように県民にとって身近で関心の高い薬分野のプログラムを組むことは、当学習センターにおいても独自性を発揮できるなど有意義と考える。

また、富山の「くすり文化」を継承・発展させ、次世代の担い手を育成するNPO法人「富山のくすし」及び「和漢医薬学会」と協働してセミナーを開催することは、本学アクションプラン中の「地域リーダー育成支援と地域貢献」に沿ったものであり、地域に開かれた大学をめざすうえで、非常に重要な取組みと考える。

ついては、漢方医学の分野で著名な講師に身近でわかりやすいテーマでご講演いただくことにより、
 (1) 漢方に興味を抱く一般市民に放送大学の理解を深めていただき、放送大学の認知度向上を図る
 (2) 若者、家庭薬販売に携わる人々にセミナーを受講していただくことで、薬を通じた地域の人材育成（地域リーダーの育成）につなげる
 等の効果を期待し、次のとおり開催した。

【開催の概要】

(1) 日時：平成25年7月13日 13:00～16:30

(2) 会場：富山県民会館（富山市新総曲輪4番18号）

(3) 開催内容

講演1 （座長 小松 かつ子 富山大学教授）

「葛根湯が作れなくなる?! ーマオウを求めて世界中を駆け巡るー」

講師 御影 雅幸（金沢大学大学院自然科学研究科薬学系 教授）

講演2 （座長 柴原 直利 富山大学教授）

「漢方診療の実際ーエビデンスを交えてー」

講師 嶋田 豊（富山大学大学院医学薬学研究部和漢診療学講座 教授）

主催者挨拶 （服部 征雄 富山学習センター所長）

・放送大学 及びNPO法人「富山のくすし」の概要説明

(4) 参加者数 103名（うち放送大学関係者21名）

* 関連ウェブサイトURL

<http://www.sc.ouj.ac.jp/center/toyama/2013/08/011694.html>

* 実施体制（主催、共催、後援等）

共催：放送大学富山学習センター、NPO法人「富山のくすし」、和漢医薬学会

後援：富山県、富山県教育委員会、北日本新聞社、読売新聞北陸支社、富山新聞社、NHK富山放送局、北日本放送（株）、富山テレビ放送（株）、富山エフエム放送（株）、（一社）富山県ケーブルテレビ協議会

* 事務局体制（人数等）

事務局員 計10名

(総括責任者(富山学習センター所長) 1、座長 2、司会進行 2、受付等 5)

2. プロジェクトの成果

(1) 放送大学の認知度向上について

参加者は計 103 名であったが、本学学生を除く方々が 80 名程度参加された。定期的で開催しているこれまでのオープンセミナーではこれほど多くの参加実績はないため、放送大学を知っていただくという点では成功だったように思われる。(朝から一時強い雨が降る中で参加者数の減が懸念されたが、100 名を超えてよかったと考えている。)なお、セミナーには地方紙 2 社が取材に訪れ、翌日の朝刊には写真付きの記事で開催状況が掲載されている。

(2) 参加者の満足度について

薬と健康関連のセミナーのため、参加者はもともと関心が高い方と想定されたが、参加者の多くが熱心にメモをとり、講演の終わりには多くの質問が寄せられたため、参加者の満足度は高いのではないかとと思われる。

3. プロジェクトの課題

講演の内容について

NPO 法人「富山のくすし」、和漢医薬学会との共催でセミナーを開催したが、NPO 法人等の関係者は、一定程度の薬の知識を有する方である。

今回は、講演 1 が葛根湯という身近な薬の成分であるマオウの植生や栽培研究というわかりやすい内容のもの、講演 2 が実際の診療の事例を交えた漢方診療という少し高度な内容のものであって、バランスがとれていたが、今後、開催するに当たっては、講演の内容をどの程度のレベルのものにするか調整が必要であると感じた。

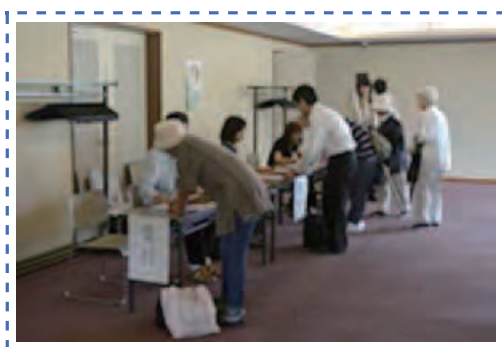
4. 今後の展開計画

前記のとおり、薬と健康という県民にとって非常に身近でわかりやすいテーマであること、NPO 法人等との共催により家庭薬販売業者等からの参加が見込めること等により、放送大学の認知度向上、薬を通じた地域の人材育成につながるため、引き続き NPO 法人等と連携したセミナーを継続していきたいと考えている。

5. 参加者の感想

- 漢方薬を守る、育てることの大変さや、研究としてのおもしろさがわかりました。
- 専門的な内容ではあったが、写真等を用いてわかりやすく興味のわく内容でした。
- とかく現代人は体の不調を抱えて生活しているが、病気ではない不調に対して対処できる漢方診療は今一度見直す必要があると感じました。
- 西洋医学ではあまり良い治療がないものにも効く漢方治療があるということに驚きました。また、西洋医学と漢方診療を合わせた治療もあるということを知りました。
- 今回の講演を聞いてもっと漢方について知りたくくなりました。このセミナーを継続してほしいと思います。

6. 写真



受付



講演1「葛根湯が作れなくなる?!
—マオウを求めて世界中を駆け巡る—」



御影 教授



休憩（NPO法人からハーブティーを提供）



質疑応答



講演2「漢方診療の実際
—エビデンスを交えて—」



嶋田 教授



主催者挨拶（放送大学の概要説明）



服部 所長

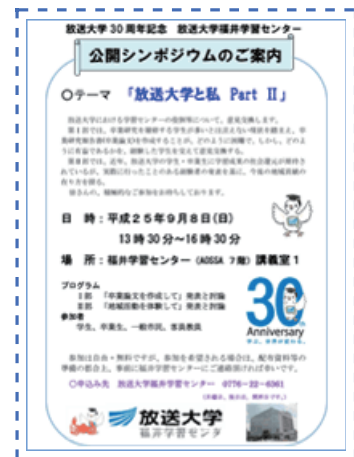
[▲ページの先頭へ](#)

プロジェクト名：シンポジウム「放送大学と私 Part 2」の開催

1. プロジェクト概要

福井SCでは、第2期業務運営計画、アクションプラン等に基づき、2010年以来、独自の福井SC実施計画を立て、多様な学生支援活動を実施してきた。特に、2011年1月には本SCに在籍する全ての学生を対象にアンケート調査を行い、報告書を全学生に配布、2012年9月には同窓会と連携しながら、今まで長く福井SCに関わってきた関係者を一堂に集めアンケート結果を踏まえたシンポジウムを開催し、その内容も報告集としてとりまとめ、再び所属学生全員及び関係者に配布し、そこで提案されたことについては着実に実行に移してきた。

今回は、「放送大学と私 Part 2」として、より具体的に、第1部を、卒業研究報告書の作成を経験して、第2部を地域活動体験と放送大学に望むことを主題とした、発表会と討論を行うシンポジウムを開催した。



チラシPDF

*実施体制（主催、共催、後援等） 主催 福井学習センター

*事務局体制（人数等） 所長、事務長、職員2名

2. プロジェクトの成果

このシンポジウムには、学生、卒業生、客員教員23名が参加した。第1部では卒業研究報告書を作成した経験を持つ卒業生2名による発表の後、参加者との質疑応答があり、報告書作成に取り組むことにより、当初は曖昧であっても、自分の考えがより明確になること、また、調査方法や長い文章のまとめ方など、技術的な点を学ぶことも多いことが強調された。第2部では、一人は小学生の学外生活を支える地域活動、もう一人は、農村での山菜やキノコの食の在り方の相談・指導に対して、放送大学で学んだことがどのように生かされているかについて報告があった。活動と学ぶことが一体化していることに、参加者は大きな感銘を受け、議論は学ぶ目的の在り方にまで及んだ。シンポジウムの報告集は、所属学生、卒業生に配布され、参加できなかった学生、卒業生にも大きなインパクトを与えるものと確信している。

[福井SCプロジェクト 第2部報告](#)

3. プロジェクトの課題

SCの特定な課題を議論するようなシンポジウムへの参加者は必ずしも多くはないので、報告集を作成し、関係者全員に配布する試みを続けているが、シンポジウムに参加し、お互いに意見を交換し合うことがより有益であることを周知し、参加者数の増加に努めたい。

4. 今後の展開計画

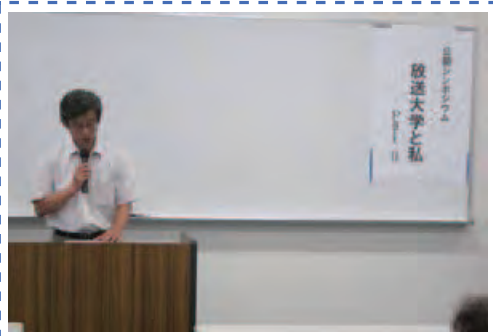
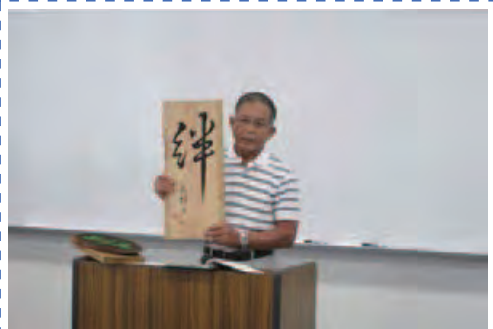
- ・卒業研究の教育価値の高さを再認識したが、学生にどの程度積極的に勤めるかを見極める。
- ・学生・卒業生の地道な地域活動の高さを実感した。継続して実態の把握に努めたい。

5. 参加者の感想

1部で卒業論文を書かれた方々は素晴らしいな、とても私なんかそこまで行き着けないなと思って、遠い存在のように感じながらお聞きしていました。2部でありました科目制だけではなくて、10年間余裕があるから、余裕を持ってやってください、それでいいですよと言われたので、それを選んだのですが、いつ卒業でき

るかということも目的も特に今のところありません。何か自分のやりたい科目、自分の勉強したいことをやりつつ、その時が来たら挑戦してみようかなと思うかもしれません。今日の1部と2部を通して、私にとって大変いい刺激になりましたし、勉強になりました。

6. 写真



[▲ページの先頭へ](#)

プロジェクト名：高山地区における地域と連携した公開講演会の開催

1. プロジェクト概要

放送大学岐阜学習センターは、放送大学創立30周年を契機に、各種記念事業を通じて、関係機関・団体の皆様とともに、地域貢献活動の一層の推進を図っている。

この記念事業を一環とし、高山市、高山自動車短期大学那などの地域の皆様と連携して、地域特色を活かした公開講演会を開催することにより、高山の魅力を多くの皆様に周知していく。

配布資料

- * 実施体制（主催、共催、後援等） 高山市・高山自動車短期大学
- * 事務局体制（人数等） 所長・事務長・職員（2名）
高山市（2名）
高山自動車短期大学（2名）



 [チラシPDF](#)

2. プロジェクトの成果

高山市・高山自動車短期大学と連携して、「学生教育とモータースポーツ-ラリー（泥の教室）-」と題して高山自動車短期大学の坂井歩准教授による公開講演会を古い街並みにある高山市図書館で開催した。飛騨高山の魅力を多くの皆様に周知することを目標としているため、6報道機関の告知報道もあり、県内外から70人の参加があった。

短大のラリー総監督でもある坂井先生から、9月に出場した北海道ラリー参戦を事例にあげて講演があり、参戦車両の深刻なトラブルをチームワークで乗り越え完走した時の学生メカニックの歓喜の姿は、参加者に大きな感動を与えた。ラリー参戦車両の展示は参加者・来場者の注目を浴びた。また、ナビゲーターが講演会の企画段階から運営まで献身的に参画している姿は、放送大学生の魅力として参加者から賞賛を得ることができた。

3. プロジェクトの課題

公開講演会は、受講生、とくに高山地区市民に大変好評だった。四年制大学がないこともあり、市民のみならず高山市、高山商工会議所などからも、大学らしい講演を継続して開催してほしいとの要望がきている。

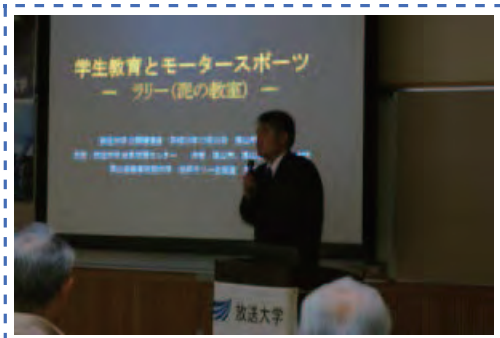
4. 今後の展開計画

高山市・高山自動車短期大学などとの連携を一層強化し、市民などからの要望に応えるため、市民及び放送大学生を対象とした「連携セミナー」について、新たに継続開講する方向で企画を進めている。

5. 参加者の感想

「学生教育とモータースポーツ」という演題から色々連想しながら聴講しましたが、体験学習のような「参加」目的ではなく、まさしく「参戦」を目的とした実践教育の話でした。特に講義後半「ラリー参戦レポート」での夜間サーチライトに照らされた整備作業の様子には緊迫感があり、時間内に必死で自分のミッションを完遂させようとする学生の姿についてこちらも手に汗を握るほどでした。そして、前半で坂井先生が話された大学での講義と実習、仲間と試行錯誤しながらのトレーニングといった積み重ねがこの過酷な環境のなかチーム力として結実するのだと理解しました。終了後会場前でラリー参戦車の説明をする学生さん達がとても頼もしくみえました。

6. 写真



[▲ページの先頭へ](#)

プロジェクト名：世界遺産登録を見据えた「富士山学」の構築と地域リーダーの育成

1. プロジェクト概要

富士山の持つ信仰、芸術などの文化的意義、富士山の景観、自然などの環境的意義、富士山の保全管理、自然保護など、富士山を取り巻く諸分野を探究する「富士山学」を構築するとともに、これらの知識に裏付けられた地域リーダーの養成を目指す。本年度は、中腹にある「県立富士山麓山の村」を会場とし、富士山に関わる文化的価値、自然的価値を座学だけでなく、フィールドでの観察や実体験を加えて身に付いた知識習得を目指す。これらの事業は、静岡県文化・観光部文化学術局や各市町教育委員会の協力のもとで、対象学生を放送大学学生にとどまらず一般参加を可能にして実施した。



[富士山学配布資料](#)

*実施体制（主催、共催、後援等） 主催 静岡学習センター
後援 静岡県教育委員会

*事務局体制（人数等） 初日 所長・担当・事務職員・事務長（宿泊は所長・担当）
2日目 所長・担当・事務職員・事務長

2. プロジェクトの成果

参加者の半数近くの一般社会人と学生が富士山の植物の特殊性や世界文化遺産登録の意味するものを共有することが出来た。宿泊することで時間を作り、講師らと語り参加者同士意見を出し合うことでより深く富士山学を知識として知り得た。その上参加型体験学習のぶなの原生林学習や杉の枝打ち体験また世界文化遺産資産の見学により、より印象深い富士山学の学習となった。学生の多くは放送大学を本格的に活用していて、一般の社会人に知らず知らずの内に大学をアピールしていた。参加者の多くは今回の企画に賛意を申し送り次回も参加希望者が多い。富士山という文化遺産を学習することにより、この文化の保存や維持に協力的・積極的な社会人を生み出していると確信した。

3. プロジェクトの課題

89人の参加者のうち一般の参加者は42人。地域市町の広報等に協力をいただいたが、ボランティアガイドからただ富士山大好き人間まで多様な人が集まった。今後どの層をターゲットに講師や内容を選択するか苦慮する。

4. 今後の展開計画

文化遺産としての富士山に関わる多分野の知識の深化と富士山の保全に向けた諸活動への参画を念頭において、富士山学に関わる面接授業の増開設とともに講演と実地体験をコラボした体験学習会を企画する。

5. 参加者の感想

富士山文化遺産登録の紆余曲折の後の登録のお話に、登録までの規則や御苦労を知り頭が下がります。登録をしたら永久で無く抹消される事実もあり、今後は地元として、保護に力を合わせてできることを考えていきたい。体験では森林植生の見学を選び参加した。ぶなの原生林では樹木の種類など詳しくおしえていただきたくさんの学習が出来ました。また、少ないぶなの苗木を見つけられて嬉しく思いました。宿泊場所については高校生に戻ったような感じでその歴史を教えていただき、私は静岡県の自慢としていいと思いましたし、体験できてうれしかった。今後は24ある構成資産を順々に廻っていくコースでお願いしたい。今回はお若い方が多かったのですが、芸術面などなら平日でも時間が自由になる人がいるのではと思います。学生ではありません

が、参加できありがとうございました。

6. 写真と映像

■映像

プロジェクト 初日

▶ 再生する

プロジェクト 二日目

▶ 再生する

■写真



富士山麓山の村多目的ホールでの講義



講義中の静岡大学特任教授 増澤武弘 氏



ぶな原生林での体験学習班 増澤教授



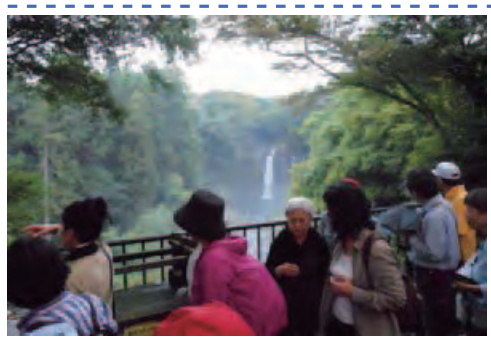
樹齢300年ぶなの大木に少し興奮気味



ヘルメット姿の枝打ち体験班の出発前



雨中でも食事をリヤカーで宿泊棟へ運ぶ



白糸の滝、残念ながら工事のため滝壺まで行けず。



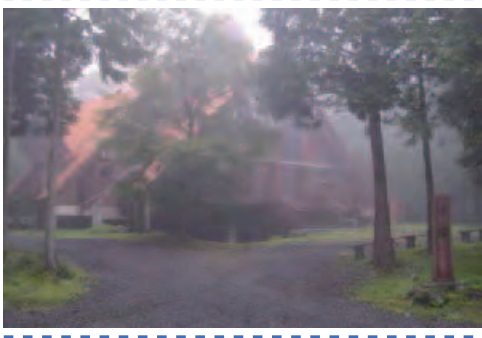
富士山本宮浅間大社 ボランティアガイド説明



高枝切り鋸を使って枝打ち体験



苔むす原生林を現場に向かう枝打ち体験班



富士山麓山の村 朝靄にかすむ宿泊棟

[▲ページの先頭へ](#)

近畿ブロック

プロジェクト名：「学ぶことの意味」（放送大学創立30周年記念協賛 公開講演会ならびにトークショー）

1. プロジェクト概要

鷺田清一大谷大学教授（元大阪大学総長）を迎え、氏のメイントークのあと、氏を囲んで京都学習センター藤原所長と大阪学習センター林所長が「放送大学における学びの意味」について多角的に語り合った。（10月25日開催）

【開催予定】

○一般・参加無料（定員150名）

日時：平成25年10月25日（金）18時00分～20時00分

会場：グランフロント大阪 ナレッジキャピタル カンファレンスルームタワーB 10階 Room B01

18:00～18:05 開会の挨拶

18:05～19:05 特別講演

19:05～19:15 休憩

19:15～19:55 フリートーキング

19:55～20:00 閉会の挨拶

*実施体制（主催、共催、後援等） 主催：近畿ブロック学習センター

*事務局体制（人数等） 主催：近畿ブロック学習センター事務長（6人）、
大阪学習センター職員（3人）



チラシPDF

2. プロジェクトの成果

今回の公開講演会は、学習センターだけではなく、放送大学を卒業された方や一般の方が入場できるようにしており、講演の開催時刻までは、前のスクリーンに近畿6つの学習センターの広報をスライドショーの形式で行った。また、近畿ブロックでの開催ということで、全所長、全事務長が出席し、一致団結の気風が強くなった。鷺田氏の講演は、放送大学創立30周年記念に相応しい、味わい深く豊かな内容であり、参加者はみな満足して帰宅した。

3. プロジェクトの課題

時間が全体的に短く、特にトークショーでは時間が短くなってしまった。今後、同様な講演会を開催するのであれば、それぞれに時間に余裕を持つべきと感じた。

4. 今後の展開計画

今回の講演内容を引き継ぐかたちで、学生の要望に応えることができるような講演会を企画したい。

5. 参加者の感想

数年前の大阪学習センター開設20周年記念講演では、鷺田先生は生活の知恵を大切にすることなど身近な知を重視にすることを話されたことが印象に残った。今回もそのあたりの期待以上の話をされて、新しく話題のあるビルで行われたが、そこに足を運んだことよりもっと意義のある話で大変感謝している。

そこで印象に残ったのは、「学びに意義や目的を求めずに、もっと見晴らしのよい場所を求めていくのが学ぶことの意味」の旨のことである。10年前の放送大学駆け出しの頃なら全くわからないと想像したが、今なら何となく分かる気がする。

今春、再々入学したがはっきり言って私にとって難しい内容ばかりである。でも、ここで鷺田先生が話された

内容を肝に銘じて何とか3度目の卒業に繋がりたいと更に思わせる講演会だった。

6. 写真



[▲ページの先頭へ](#)

奈良学習センター	URL : http://www.sc.ouj.ac.jp/center/nara/
プロジェクト名 : シンポジウム「平城宮の様子は、ここまで分かった！！平城宮跡をどうやって楽しむ？」	
1. プロジェクト概要	
<p>奈良学習センター 所長池原健二の「シンポジウムを通して放送大学や平城宮跡を良く知ってもらい訪れた時に更に楽しむための参考にしていただきたい。」との開会挨拶に続いて、上野邦一客員教授の総合司会&コーディネートにより奈良文化財研究所の小澤毅、奈良大学教授寺崎保広、竹中大工道具館植村昌子さん、イラストレーターの早川和子さんが、それぞれ講演を行った。</p> <p>会場には講演者のテーマに沿ったパネルを31枚設置し、講演内容をビジュアルに表現した。また開催終了2日後に奈良テレビで上野教授が平城宮跡発掘における「発掘調査の理念」を解説して、その素晴らしさを示した。新聞の企画記事においては講演のポイントを紹介された。</p> <p>*実施体制 主催：奈良学習センター (主催、共催、後援等) 後援：奈良市教育委員会、奈良文化財研究所、奈良女子大学、奈良大学、竹中大工道具館、NHK奈良放送局、奈良テレビ、奈良新聞社</p> <p>*事務局体制(人数等) 開催責任者：所長1名、開催スタッフ：2名、開催電話対応及びセンター運営5名計8名</p>	
2. プロジェクトの成果	
<p>開催広報を「市民団体・ボランティア」を中心に行った結果、幅広い年齢層170名が参加し、4分野の方向から平城宮について語られ非常に興味深く聴きいていた。また講演後の質疑応答タイムでは、長時間のシンポジウムであったが、市民団体からの「復元事業に対する環境影響」に関する事や宮を建てた大工道具の「刃痕」からの研究の事や、発掘データを基にして描かれたイラストの秘密等に興味と驚きの意見が終始交わされた。</p> <p>開催目的の地域貢献項目「市民団体・ボランティア」について会場内で大いに成果を得ることが出来た。また会場外ではテレビ新聞等でシンポジウムのポイントや発掘の素晴らしさを伝えられた。</p>	
3. プロジェクトの課題	
<p>奈良での数ある平城宮の講演会の中でも、今回の行った4方向からのシンポジウムは珍しくて、好評だった。学術的な事に加えて、当時の人物や歴史的ドラマ、背景的な事についても触れることによって、より受け入れやすくする必要がある。</p>	
4. 今後の展開計画	
<p>大学の地域貢献で評価が低いといわれる「職業人の再教育」、「市民団体・ボランティア」の項目向けの面接授業や公開シンポジウムに取り組んでいく。具体的には、歴史遺産に関するテーマの面接授業を更に取り入れると共にセンターでのプチ公開シンポジウムを企画していくこととする。</p>	
5. 参加者の感想	
<p>公開シンポジウムに関する感想ですが、発掘調査の第一線で活躍されている方々の講演だけに説得力がありました。小澤さんの講演は(かなり専門的で追いつくのが大変でしたが)考古学の調査研究がどのように進められているのか一端を垣間見ることができて興味深かったです。調査の結果、判明したことや事実関係は新聞・テレビで触れることができますが、研究者たちの研究プロセスはなかなか学ぶ機会がありません。それだけに価値ある講演だったと思えました。遺跡の現地説明会は関東からも遠路来られる方が大勢いらっしゃいます。東京など首都圏でこうしたシンポジウムを開くとまた違った反応が得られるかもしれませんね。個人的にはイラストレーターの早川さんの講演が異色で興味深かったです。イラストを目にする機会は多いですが、描く上での苦労などなかなか聞く機会がないので、今後、可能であれば現地での実地学習なども織り交せて2日間ぐらいの日程で開くことができればより面白いのではないかと思います。(Mさん、男性)</p>	

6. 写真



※ 会場に展示したパネルは、現在、学習センター内に掲示しており、面接授業参加学生、センター利用学生に公開している。

[▲ページの先頭へ](#)

プロジェクト名：シニア放送大生を対象とする実践による地域コミュニティ支援リーダーの育成
 —「孤立・過疎化から共生・共楽のまちへ」の取り組み支援—

1. プロジェクト概要

地方の都市部や農山村地区において、独り暮らしの高齢者や空き家が増加している。高齢者は孤立することが多く、孤立・過疎化は地域のコミュニティ機能を減退させ、まちを一層衰退させる。人と人の関係を作り直し、温かみのある絆・バリアフリーの交流を創出するコミュニティ再生の取り組みをする。

和歌山学習センター地域コミュニティ支援リーダー塾（現会員数14名）の学生と、地区の学生、特にシニア層を中心に、放送大学客員教員、地元大学教員、NPO等による講習・指導と地区自治体の協力を得ながら、

1. 人と人との「つながり」
2. 隣接地域との連携・協力状況
3. 「困ったこと」や「して欲しいこと」、「残したい話」、等について現地でも聞き取り調査をする。

それをもとに、

4. 地域の課題や空き家活用の考察
5. コミュニティ絆マップ、コミュニティ安心ノート、地域物語等の作成、を行う。

さらに

6. 支援ネットワークを形成して持続的支援を行う。

以上の地域貢献を通して、地域コミュニティ支援リーダーを育成する。また、放送授業、面接授業を活用した地域リーダー育成カリキュラム案を提案する。



[報告会開催案内PDF](#)



[塾生募集PDF](#)

放送大学学生、学習センターが高齢化と過疎・孤立化が進んでいる地区に対して、どのように地域貢献できるかを目的として、和歌山では、リーダー塾の学生でありその学生が住んでいる伊都郡かつらぎ町新城をモデル地区として、H25年7月から12月にかけて全戸を回る聞き取り調査を行った。新城は60戸程度の、両側に山が連なり中央に川が流れる、西南から東北に緩やかに伸びた、農林業を主業とする地である。高齢化、過疎化、少子化が進む典型的な山村であり、放置され連絡も取れなくなっている空き家があり治安が悪化、買い物や公共交通に不便、土砂災害への備えなど、現在の不自由および将来への不安を抱きながら人々は生活している。しかし、どの人も地味に恵まれている自然の豊かさ、環境のよさに誇りを持ち、愛着があってそれなりに充実、しっかりと生きている様には逞しさがある。

現在調査データを整理し、2月中旬を目途に新城において、調査の概要報告と新城イキイキプラン（仮称）を地区の人に提案するための準備を行っている。

2. 写真



地域貢献活動に臨み、専門家によるレクチャ



聞き取り調査実施を前に打ち合わせ



玄関の戸越に聞き取り調査



家の前の路上で聞き取り調査



昔は山村留学を世話していた、すぐ近くの山でマツタケがよく採れた、という。聞き取りを終わってにっこり記念撮影



家の前の道端で溝の清掃中に聞き取り調査。野菜作りに熱中。山菜にも興味があり、それらをテーマにした面接授業があるといいなあ！と



大銀杏の下でギンナンを拾っている人に



次の訪問先へ移動です



庭先の縁台にお邪魔して日向ぼっこしながら



地区一番のもの知り、元区長の方とお話し。お元気91歳



地区の伝説にならないかなあ？



まとめと提案に向け、専門家の話を聞く

アンケート調査用紙

 アンケート調査用紙.PDF

[▲ページの先頭へ](#)

プロジェクト名：過疎地域における地域リーダー育成への貢献事業

1. プロジェクト概要

岡山県の北部に位置する地方公共団体では、地域活性化のために様々な取り組みを行っている。

取り組みの一部においては、住民の中で何らかの能力をもった人材を、人材バンクに登録して貰って、地域の要請に応える体制を採っている。しかし、人材バンクを担当する部署は、これらの資源をいかにして地域活性化に生かすべきかについて確たる方針を持つに至っていない。

また、かなりの数のNPOも地域おこしのために様々な取り組みを行っているところであるが、それぞれの人材の確保、育成については有効な方策が採られていないのが現状であり、自然発生的な成り行きに任されているところである。

そこで、地方公共団体の職員を含め人材バンクやNPOに集まる住民の多くを放送大学につなげることにより、地域リーダーの育成にかかわることはとても重要なことと思われる。

そのため、今年度はこの市と連携を図り、広く地域の活性化にかかわる次の事業を展開する。

事業：講演・討論会の開催

実施日：2013年11月9日（土）@津山市国際ホテル



チラシPDF

 [放送大学岡山学習センターセミナー田城参考資料](#)

*実施体制（主催、共催、後援等）

※ 事前に「つやまNPO支援センター」と打ち合わせは行ったが、共催・後援等は無し。

*事務局体制（人数等）

※ 当SC全員で対処した。

2. プロジェクトの成果

本企画を立てるにあたって、対象地域である津山市教育委員会、さらには津山市のNPOを束ねる「津山NPO支援センター」を訪ね、同センター事務局長の村上氏と意見交換を行った。この意見交換から明らかになったことは、過疎化が進行するこの地域を活性化するために少なからぬNPOなどが活動しているが、いずれの団体も、後継者をどのように育成するかについては頭を痛めていることであった。その意味でこの企画は大変時宜を得たものであった。

岡山県の出先機関である「美作県民局」管内で岡山県が認証したNPO法人の代表者達に集まっていただき、放送大学教授の田代孝雄（地域活性化伝道師）による「地域再生、いつまでも地域で生きる」の講演を行った。

また、岡田雅夫岡山学習センター所長を司会として、田代教授及び本学岡山学習センター学生の水野博宣氏（前岡山市役所局長）、地域NPO代表として神田寿則氏（現岡山県津山作陽高等学校教頭）の参加を得て討論会を行った。

その討論会において、NPO法人を維持・継続していくための様々な問題点が提起され、参加者からも種々発言があり、活発な討論会となった。さらに、参加者（NPO代表者各位）に対して、視野の広がりを感じられる学びが放送大学で出来ることの説明を行った。

3. プロジェクトの課題

今後の課題としては、開催時期の設定について、地元との連絡を密にして企画する必要がある。また地元のNPO支援センターとの連携を密に、講師派遣などにも取り組んでいく必要がある。

4. 今後の展開計画

今現在、津山市立図書館と当SCとは良好な関係を保持しており、例年連携講座を数回開催して、放送大学の広報を行っている。次年度以降においてもこの連携を継続しつつ、地域リーダーとの話し合い等を持つなど、地域活性化への協力を行うこととしたい。

5. 参加者の感想

開催日当日、津山市では大きな地域イベントが開催されたにもかかわらずNPO代表者等が多く集まり、テーマに対する関心の高さが窺えた。

メインの田城教授による講演は、少子高齢化社会の長期的見通しを分かりやすく話され、今後地方が産業・交通・生活環境等において衰退・悪化し、地域における各種定住問題を地域住民自らが共助により解決していくことの重要性がよくわかった。そのためには地域再生リーダーをより多く育てることによるNPO活動の更なる活性化が必要であり、いかなる地域においても学べる放送大学を活用したリーダー養成が効果的だと感じた。

又、NPO代表者等からは、財政基盤の強化と若い後継者育成が大きな課題であるとの発言が相次いだ。これらの課題解決のためには、地域再生リーダーがNPOマーケティングの知識や個別分野における理論的深化を基礎とした共助機能の設計能力の修得が必要であり、放送大学の授業はこれらの要請にも大いに応えてくれると思った。

6. 写真



プロジェクト名：山口県東部地域との生涯学習推進連携（平成25年度）

1. プロジェクト概要

山口学習センターは平成23年4月に山陽小野田市から山口市に移転した。山口県東部地域への新たな生涯学習の拠点の形成のため、平成25年3月、市民活動拠点施設「ほしらんど くだまつ」を中心として、下松市教育委員会協力のもと「生涯学習活動によるまちづくりー第1回 星ふるまちのくだまつアカデミー」を開催した。

☆コンセプト

1. 市民と行政による協働のしくみづくり
2. 生涯学習によるまちづくり
3. 生涯学習ボランティアの活動などの課題

行政主導ではない、地域の住民の主導で動く組織作りで、可能な限り継続的な事業を目指す。



📄 [チラシPDF](#)

「第1回 星ふるまちのくだまつアカデミー」では、山口学習センター小谷典子客員教授の基調講演「学んで活かして まちづくり」をはじめ、地域の生涯学習活動状況や活動家、地域在住放送大学生からの体験談報告がなされ、多数の市民参加による活発な議論が交わされた。スタッフを含め、約100人の参加のもと、当初の目的でもある「生涯学習によるまちづくり」に対する理解が深められ、また地域リーダーが抱える問題点の掘り起こしなど、一定の成果を得た。

平成25年度は、昨年度の体験を踏まえ、「第2回 星ふるまちのくだまつアカデミー」を開催。講演会やワークショップ等に加え、生涯学習の取り組みや地域リーダーが抱える問題点などを検証するために、下松市内各地域でフィールドワークを実施する。その成果をいかに地域やまちづくりに生かしていくか、その方策や実施方法などを、参加者みんなで話し合う。人の輪と場を広げ、実践への第一歩とすることを目的とする。

* 関連ウェブサイトURL

<http://www.campus.ouj.ac.jp/~yamaguchi/>

* 実施体制（主催、共催、後援等）

主催 放送大学山口学習センター 下松市教育委員会

主管 くだまつアカデミー実行委員会

協力 笠戸島特産品開発グループ 深浦地域住民のみなさん

* 事務局体制（人数等）

くだまつアカデミー実行委員会（14名）

2. プロジェクトの成果

今回は下松市笠戸深浦地域で、地域が抱える様々な公共的な課題を追求する学習を通して、「深浦」で学ぶ「地域」で活かすをテーマに、実際に現地を歩くことによって、地域の資源や魅力、地域リーダーが抱える課題などを発見し、今後のまちづくりに活かす方策などについて学ぶものである。参加者は笠戸地域、深浦地域、下松市の各地域からとスタッフを含め60名で、中にはリピータの参加者もあった。基調講演のあと、フィールドワーク、地域資源活用事例紹介やグループワークを通して、参加者から地域が抱える問題に対して

活発な意見が出された。高齢者が多い、若者が定住するためにはどうしたら良いか等、また、地域リーダーも高齢化しており、これからの町づくりと地域の活性化には不安材料も多い等の声もあった。今回は実際に歩くことにより、地域の課題を見つけることができ、「生涯学習によるまちづくり」に対する理解をより深めることにより、一定の成果は得た。

開催内容は次のとおりである。

(1) 開催日時：平成25年11月23日(土) 10:00~15:30

(2) 開催会場：深浦小学校講堂及びその周辺

(3) 開催内容

- ・開会挨拶(放送大学山口学習センター所長 阿部憲孝)
- ・深浦地域の紹介(下松市社会教育指導員 田中三千男氏)
- ・基調講演 演題「まちづくりに活かす 地域の資源」(放送大学山口学習センター客員教授 小谷典子氏)
- ・フィールドワーク(グループ別に分かれて、深浦地域を実際に歩き、地域の資源や魅力、課題などを発見する。)
- ・地域資源活用事例紹介(地元の特産品(地域資源)を活かした事例紹介を通じて、地域資源の活かし方を学ぶ。笠戸島特産品開発グループ代表 守田秀昭氏)
- ・グループワーク(フィールドワークを通して、感じたことや発見したことについて、みんなで話し合い考えることによって、今後の生涯学習とまちづくりに活かす方策を見出す。(コーディネーター 小谷典子氏、コメンテーター 田中三千男氏、守田秀昭氏)
- ・閉会挨拶(下松市教育委員会生涯学習振興課長 原田幸雄)

3. プロジェクトの課題

今回は限界集落地域で実施したのものにも関わらず参加者は多かったが、今後は若年層の参加を期待したい。また、地域在住の放送大学生にも参加を呼び掛けたが、参加者は少なかった。今後は、各層への参加を期待したい。

4. 今後の展開計画

このプロジェクトは2回を終えた。地域が抱えている様々な公共的な課題を追求する学習を通して、その学習成果をまちづくりに活かしていく方策を考えるものである。1回目は、地域リーダーが抱えている問題と、各地域の取り組みの現状を事例発表することにより、参加者の共通理解を持つことが出来た。第2回目は、実際に地域に行って、その地域の魅力や課題を発見し、今後のまちづくりのきっかけづくりを得ることが出来た。次年度以降もこの事業を継続して、生涯学習とまちづくりの実践への一歩を踏み出し、ネットワークの輪を広げる場づくりを目指したい。

5. 参加者の感想

参加者の人数が50人余りいるとは驚きであり、市民のコミュニティに関心がある人がこんなにいるとは思わなかった。講演からは、まちづくりはひとづくりであることを話され単純ではあるが明解な話に素直に納得した。フィールドワークでは地元の話に耳を傾け、五感を感じながら刺激的な時間を過ごせ、まとめでは、歴史・自然・まちについて各班からいろいろな角度からの課題・提案がでて熱い思いに感動した。地元グループの人の話の中で、「身の丈に合った」とか「お互いが」という集落独自の介護等の将来像には非常に興味があった。この集落のコミュニティはかなり完成されているように感じ、おもてなしも一級品であり、そっとしておくべきか外部からのサポートを入れるべきか、繊細で緻密な計画を練らないと難しいように感じた。差詰め、八幡様の屋根の改修は地元のことをより明るくする第一歩として実行してもらいたい是非参加したいと思いました。

6. 写真



[▲ページの先頭へ](#)

プロジェクト名：平賀源内から手袋産業へ～地域産業の再発見シンポジウム～

1. プロジェクト概要

放送大学香川学習センター再視聴施設（旧白鳥教室）のある東かがわ市で、シンポジウム「平賀源内から手袋産業へ～地域産業の再発見～」を開催する。我が国最大の手袋生産地である白鳥地区には、手袋神社や手袋産業開発の父「棚次辰吉」の銅像などがある。白鳥地区を含む旧大川郡は、古くは平賀源内から南原繁（元東大総長）、真嶋正市（元東大、東京理科大学学長）まで、多くの先達を輩出した技術先進地域であった。東かがわ市民会館新設に伴い白鳥教室も移転、同市中央公民館跡地横に「香川の手袋資料館(グローブ・ミュージアム)」も開設された。この機会に、海外移転による産業空洞化に遭遇する手袋産業の再発見、再興を目指すシンポジウムを開く。本シンポジウムには、手袋産業の功労者棚次辰吉の直孫、地元関係者、香川県観光参与や知的財産法の研究者をパネリストに招いている。本シンポジウムを通して、再視聴施設「白鳥教室」の活性化と放送大学の知名度向上、学生増加に繋げる。



チラシPDF

📄 当日配布用資料

- *実施体制（主催、共催、後援等） 主催：香川SC
後援：香川県教育委員会、東かがわ市教育委員会
- *事務局体制（人数等） 所長と広報担当の2名、学生支援者2名

2. プロジェクトの成果

本シンポジウムは約90名の参会者を得て開催した。冒頭、山崎所長がシンポジウム開催の趣旨を説明した後、一人20分間の持ち時間でお話しいただいた。棚次先生の祖父辰吉氏の思い出は大変興味深いもので、シンポジウム全体の基調となる辰吉氏の人となりクローズアップされた。青江先生は、手袋産業創成期と特許制度についての説明を通して、辰吉氏のおこなった軽便飾縫ミシンの国際特許出願とその後の手袋産業の急速な発展について話された。竹内先生は、「タナツグ フィルム」をデジタル化した昭和初期の白鳥の風景を映写しながら、適切な解説を加えることを通して、手袋産業先覚者棚次辰吉氏を生んだ白鳥の風土や人々の暮らしぶりなどを紹介された。最後に登壇した橋本先生は、手袋産業従事者の一人として、125年の歴史をもつ「手袋産業の過去・現在・未来」について熱く語られた。その後山崎所長が、会場に展示した7枚のパネルや、「東讃地域の科学・技術者たち」8名について補説したあと、シンポジウムをまとめた。なお、藤井東かがわ市長も参加されており、最後に登壇していただき一言ご挨拶をいただいた。これにより、多くの方々に放送大学の魅力を感じていただき、学生増加に繋がるものと期待する。

3. プロジェクトの課題

本シンポジウムの開催と学生募集の成果との関係を断定できるものではないが、本シンポジウム終了後も、学生募集と連動する公開講演会を定例化したい。

4. 今後の展開計画

2時間にわたる本シンポジウムの様子はもちろんのこと、白鳥町をはじめとする旧大川郡の歴史や風土さらには、平賀源内から南原繁にいたる科学・技術者の系譜をまとめた報告書を作成する。

5. 参加者の感想

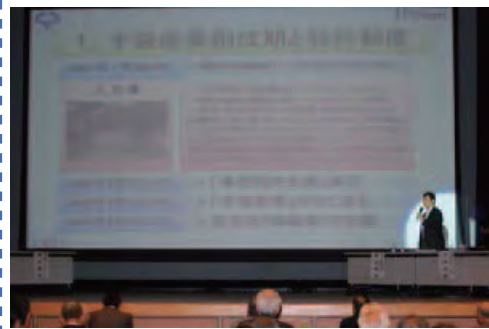
私は香川に住んで30年になります。定年を期に地元の歴史・文化の学習を始めています。この度関心の持っていました“平賀源内から手袋産業へ”のシンポジウム開催を知り、早速参加させていただきました。

地元ご出身の各界著名な方々からのご講演や、日頃拝見することのない貴重な記録映画鑑賞など、大変興味深い内容でした。参加して本当に良かったと思っています。有り難うございました。

中でも、登壇者棚次教授の祖父が明治33年（1900年）に手袋製造のための「ミシン」を発明され国内特許はもとより、欧米にも特許出願をされ、今日の「知的財産権」に関するその先見性に感服をいたしました。そして、同地（東讃）には平賀源内翁から始まり、日本を代表する多くの科学者が排出されているとのことでした。

“なぜ”その疑問に改めて学ぶきっかけを頂いたように思いました。





6. 写真



7. 新聞記事

[【四国新聞】](#)（外部サイトへ移動します）

※2013年12月6日「四国新聞社 SHIKOKU NEWS」に掲載

高知学習センター	URL : http://www.sc.ouj.ac.jp/center/kochi/
プロジェクト名 : 高知の地域人財発掘・育成プロジェクト	
1. プロジェクト概要	
<p>本プロジェクトは、Ⅰ『地域人財育成道場（入門編）』とⅡ『看護（みまもり）人財の育成』の二つの事業により実施する。</p> <p>Ⅰ『地域人財育成道場（入門編）』では、地域人財に必要な能力として、多様な考え方を持つ人たちと議論を進めるために必要なファシリテーション力・コミュニケーション力などの基本的能力・技術の修得と、高知県が持つ様々な課題を地域に出て体験し学ぶことを通じて、地域の課題解決や活性化への意欲を持った人財を発掘し、自治体やNPOが実施する地域活性化プロジェクトへの参加を促し、自治体等との連携を推進する。また、この事業を通じて、参加学生が地域社会における「居場所」や「出番」を意識することによって学習意欲を喚起するとともに、能力開発や地域活性化に関する面接授業として次年度開講の可能性を探る。</p> <p>Ⅰ『地域人財育成道場（入門編）』</p> <p>①  ファシリテーション力養成道場</p> <p>日時：2月7日（金）・8日（土）両日とも10：00～17：30</p> <p>場所：高知大学共通教育棟310番教室</p> <p>定員：10名</p> <p>講師：俣野 秀典 高知大学総合教育センター講師 塩崎 俊彦 高知大学総合教育センター教授</p> <p>②  地域に関する課題探求セミナー （高知県 結プロジェクト推進事業）</p> <p>日時：2月22日（土）～23日（日）1泊2日</p> <p>場所：高知県宿毛市橋上町楠山「山里の家」及び楠山集落</p> <p>定員：5名</p> <p>講師：今城 逸雄 高知大学総合教育センター 特任講師</p> <p>③  プレゼンテーション・話し方講座</p> <p>日時：平成26年3月15日（土）・16日（日）両日とも10：00～16：00</p> <p>場所：放送大学高知学習センター3階 講義室（小）</p> <p>定員：20名</p> <p>講師：貞岡 美樹（フリーアナウンサー・絵本セラピスト・産業カウンセラー）</p> <p>Ⅱ『看護（みまもり）人財の育成』は高知県の重要施策である「日本一の健康長寿県構想」における保健・医療・福祉の各分野の様々な取り組みの中で、地域医療分野における「新人看護職員が定着しない」という課題に対応するため、地域人財育成に係る高知県との連携事業として実施する。</p> <p>この事業は行政、教育、看護協会など県内の看護に関わる団体が参加し、「県内どこの病院に所属していても新人職員が教育を受けられる＝高知型新人看護職員研修」を推し進めるために「高知県新人看護職員研修推進協議会」を組織し、研修に係る企画・実施については放送大学高知学習センターと連携して実施する。</p> <p>Ⅱ『看護（みまもり）人財の育成』</p> <p> リレー講演会「育て！高知の新人看護職員」</p> <p>①【講演会】「エビデンスに基づく看護技術の実践」</p> <p>日時：12月21日（土）13：00～16：00</p>	

会場：土佐市民病院会議室

定員：100名

講師：田中 登美（甲南女子大学 看護リハビリテーション学部准教授）

②【実技講習会】「エビデンスに基づく吸引の技術」

日時：12月22日（日）9：30～12：00

会場：あき総合病院 やまのホール作業療法室

定員：50名

講師：永野 由紀（高知大学医学部附属病院 集中ケア認定看護師）

③【講演会】プリセプター・教育担当者の「教える力」向上のための講演会

日時：1月11日（土）13：00～17：00

会場：幡多けんみん病院 大会議室

日時：1月12日（日）13：00～17：00

会場：高知大学メディアホール

定員：100名

講師：渡部 須美子（株式会社 ジャパン・メディカル・レスポンス 社長）

4. 放送大学看護系科目テキストの寄贈（県内4ブロック病院等）

この取組みの狙いは、放送大学を活用した学士（看護学）の学位取得について新人看護職員を含む地域の看護職の方々へ周知することであり、実際にテキストを手にして、本学のカリキュラム・教育内容の優れた点を理解してもらい、本学への入学・学習へと繋げる。テキストの寄贈に際しては、冊子「学士（看護学）の取得を目指す方へ」の拠点施設への配架もあわせて行い、放送大学での学びをプロモートする。

・配架場所：高知市ブロック（高知県看護協会）、須崎・中央西ブロック（須崎くろしお病院）、幡多ブロック（県立幡多けんみん病院）、安芸ブロック（あき総合病院）

* 関連ウェブサイトURL

[地域に関する課題探求セミナー（高知県「結」プロジェクト推進事業）](#)

[📖 テキストの寄贈（高知県看護協会：看護こうち11月号）](#)

* 実施体制（主催、共催、後援等）

I 『地域人財育成道場（入門編）』

主催：放送大学高知学習センター

共催：高知大学、高知県産業振興推進部中山間地域対策課、宿毛市

II 『看護（みまもり）人財の育成』

主催：放送大学高知学習センター

共催：高知県新人看護職員研修推進協議会、高知県健康政策部医療政策・医師確保課、高知県看護協会

* 事務局体制（人数等）

放送大学高知学習センター教職員6名を中心として各事業の共催団体担当者とともに実施した。

2. プロジェクトの成果

I 『地域人財育成道場（入門編）』

①ファシリテーション力養成道場

高知大学17名と放送大学9名の学生計26名の参加があり、様々な年齢層の学生が入り交り、グループワークを中心に実施した。年齢の壁を感じさせない活発な議論や演習が繰り返され、終了後のアンケート結果では放送大学学生の8割が実施内容に満足している。

学生の参加動機は「仕事で多様な意見をまとめる役割をすることがある」「地域の中で役員として活動する場

が増えているため。多様な住民の意思を生かせる知識を得たい」「話を組み立てたり、意見を集約することに苦手意識があり克服したい」など、この事業の趣旨・目的に合った学生の参加が大半であり、地域人財に係る能力開発型の授業実施に自信を得た。

②地域に関する課題探求セミナー

高知県産業振興推進部中山間地域対策課が行う「結プロジェクト推進事業」に高知大学3名、放送大学3名の学生と両大学の教職員3名が参加する形で実施した。高知県中山間地域の宿毛市楠山地区において開催される「梅まつり」の実施支援と着ぐるみ製作やイベントの企画・実施が主な内容であったが、初日午後と夜の2回、地域住民の方々と楠山集落キャラクター「うめぞう君」誕生話や地域活性化の取り組みなどについて意見交換があり、途中ヒートアップするなど熱心な議論となった。

今回、この事業に参加した放送大学学生3名は地域活性化に強い関心があり、地域住民と積極的にコミュニケーションをとる姿勢をもっており、今後、高知学習センターにおける地域人財・リーダーとして中心的なメンバーになってくれると期待している。

③プレゼンテーション・話し方講座

定員を超えて22名の申し込みがあり、学生の関心の高さが窺えた。講座1日目は学生の話し方をビデオ撮影し、グループワークで意見を出し合いながら改善していく手法により、話の組立て方や発声法、視線の使い方など技術的な手法を学び、2日目は絵本を使って感情をつける話し方を学んだ。

アンケート結果からは、「ビデオで自分の話し方を見て恥ずかしかったが、指導の後には改善できたことが確認できた」「学んでことを実践して能力として定着させたい」など自身の能力向上への意欲についての意見・感想が大半であった。

II 『看護り（みまもり）人財の育成』

①「エビデンスに基づく看護技術の実践」

 [\(アンケート結果\) エビデンスに基づく看護技術の実践](#)

②「エビデンスに基づく吸引の技術」

 [\(アンケート結果\) エビデンスに基づく吸引の技術](#)

③プリセプター・教育担当者の「教える力」向上のための講演会（中部・西部）

 [\(アンケート結果\) プリセプター・教育担当者の「教える力」向上のための講演会（中部）](#)

 [\(アンケート結果\) プリセプター・教育担当者の「教える力」向上のための講演会（西部）](#)

高知県中部・東部・西部を巡るリレー講演会「育て！高知の新人看護職員」として企画・実施した。

このリレー講演会の内容や開催場所については、7～8月にかけて各ブロックの新人看護職員育成に対する放送大学に期待するニーズの調査を行い、そのニーズを基に研修会（講演会・実技講習会）を高知県新人看護職員研修推進協議会と共同で企画した。

参加数は「エビデンスに基づく看護技術の実践」28名、「エビデンスに基づく吸引の技術」12名、プリセプター・教育担当者の「教える力」向上のための講演会（西部9名、中部45名）の計176名であり、特に高知県西部の講演会では隣県の愛媛県南予地域からも12名が参加するなど盛況であった。

この事業の性質・内容からも参加者176名は全て医療従事者であるが、高知学習センターにおける広報だけでは、このような同じ職種・人数を集めることが難しく、連携先の高知県健康政策部医療政策・医師確保課及び高知県看護協会による積極的な広報や呼びかけが有効であった。

昨年度から高知県健康政策部医療政策・医師確保課及び高知県看護協会との事業連携が始まったが、本年度の事業を経てその関係は醸成しており、今後も継続して高知県看護職員の人財育成に関与していく。

4. 放送大学看護系科目テキストの寄贈（県内4ブロック病院等）

寄贈した拠点施設のリーダーである県看護協会長、各病院看護部長からは感謝とともに「テキストを活用して新人看護職員教育の推進を図りたい」と前向きな意見があり、県内看護師の学士（看護学or教養）学位取得の

推進に向けて、事業連携を通じて積極的に働きかける。

3. プロジェクトの課題

I 『地域人財育成道場（入門編）』

・グループワークによる能力開発型演習（ファシリテーション力養成道場など）や、地域住民とコミュニケーションが必要な地域体験型講義・演習（地域に関する課題探求セミナーなど）は、実施の趣旨・目的や身につけようとする能力を理解し、地域・社会に関心や意欲を持った学生の参加が重要である。

そのため、面接授業で実施する際はシラバスの「授業概要」「学生へのメッセージ」において、履修希望学生に求めるものを提示し、一定の履修制限が必要ではないか。

・地域体験型講義・演習を実施する際は、自治体との連携、地域の選定・マッチングや授業計画などそれらをマネジメントする教職員の存在が重要であり、その確保が継続実施のポイントである。

・地域に興味・関心を持つ学生の集団化

II 『看護（みまもり）人財の育成』

・高知県や看護協会との連携の基盤は確立しているが、今後は放送大学が提示する研修メニューが高知県や看護協会が実施する研修に内包されるよう働きかけ、組織的な取組みとして継続していけるかどうか。

・放送大学のリソースだけで看護師のニーズを満たす研修メニューを提供できるか、また、継続して実施するためには一定の予算確保が必要であると考えている。

4. 今後の展開計画

I 『 地域人財育成道場』

来年度2学期の面接授業として、能力開発型演習の総合科目「ファシリテーション入門」（10/18・19）、「高知県東部地域博覧会推進協議会」連携の下、高知県東部をフィールドとした地域体験型講義の共通科目（社会系）「体験観光から学ぶ地域観光入門」（11/8・9）を開講し、履修学生の中から新たな「地域人財」候補者を発掘する。また、引き続き高知県産業振興推進部中山間地域対策課が行う「結プロジェクト推進事業」に参加し、その参加学生の中からも「地域人財」候補者を発掘する。

II 『看護（みまもり）人財の育成』

放送大学が実施する研修メニューが、高知県や看護協会が実施する研修の一つとして位置づけられるよう働きかけ、連携型研修として継続実施を図る。また、その研修を通じて県内看護師の学士（看護学or教養）学位取得や心理士資格に関する直接的な広報を実施する。

5. 参加者の感想

（地域に関する課題探求セミナー参加者）

このセミナーで宿毛市楠山地区を訪れ、全国と比較して人口減少で15年、高齢化で10年先行している高知県が抱える共通の問題を体感しました。楠山地区の現状を紹介する際に区長が話されていたこの地区の将来への不安は、「梅まつり」の実施をお手伝いするなかで、この地区には若者がいないこと、前日の準備に参加した方々と顔ぶれが変わっていないことから実感しました。

今回、高知大学の学生と一緒に、県の「結プロジェクト」を通じて「梅まつり」に参加したなかで、我々放送大学の学生は、平均年齢50歳を超える面々であったのも関わらず、地域の方々に温かく迎えていただき、また、地域に関して意見交換できたことは大変、有意義な時間でした。

現代において地域を守る、維持するということは大変厳しい時代ですが、楠山地区に現在、住まわれている方々の人と人とのつながりや地域キャラクター「うめぞう君」のアイデアなど、小さな集落でも現状を打破したい、何か変わらなければという強い思いを感じました。地域外の人々に楠山地区の魅力を知ってもらい、感じてもらうためにも、積極的な広報により近隣住民との交流を定期的に行い、新たな資産の発見や若者の移住支援などを進めていけば魅力ある地域になると思います。

最後に、高知県中山間地域の活性化のため、このように学生や地域外の間人がその地区に入ること、地元の人では気がつかない資産や習慣など活性化の種やアイデアが出て、地域の活性化につながっていく可能性を秘めており、地域住民との交流や催事のお手伝いなど、我々大学生の力を地域の方々にもっと利用していただき

たいと強く感じるとともに、今回の「結プロジェクト」などの活動を継続していくことが重要であると思っています。

6. 写真



10/9(水) 高知県看護協会にて
宮井会長へ目録・テキストを贈呈



10/22(火) 須崎くろしお病院にて
古屋看護部長へ目録・テキストを寄贈

[▲ページの先頭へ](#)

九州・沖縄ブロック

プロジェクト名：ふる里創生地域リーダー養成 in 九州・沖縄

プロジェクト概要

九州・沖縄ブロックの各学習センターが、それぞれの地域の特性とニーズを踏まえ、行政との連携と地域・近隣大学の専門家の協力を得て、調査・研究・講義・演習・実習等を実施し、地域リーダーを育成するプロジェクト「ふる里創生地域リーダー養成 in 九州・沖縄」を実施する。

各センターのプロジェクト概要は以下である。

福岡学習センター：里山・里地・里川の保全計画を策定するために、講演会を実施し、自然保全のためのリーダーを育成する。

(責任者 柝原所長, 代表者 大槻恭一九州大学教授)

1. プロジェクトの内容

1) 目的

里地・里山・里川は人口の減少、高齢化の進行、耕作放棄地の増加等に伴い、動植物の生息・育成環境の低下、野生鳥獣の増加による農林業や山間地域の生活への影響の深刻化、また、景観や国土保全機能の低下など、様々な問題が生じている。そこで、福岡学習センターでは里地・里山・里川に焦点を当て、九州大学大学院及び(財)サンビレッジ茜と連携し、下記の取り組みを通して里山等の保全と里山の再生を担っていく地域リーダーを育成する。

①里山・里地・里川の保全のためのリーダー養成

里山・里地・里川の保全を推進していくため、大学の教授等による講演会を実施することにより、里山等の保全に関する専門的な知識を習得し、さらに里山等の現状を観察し体験活動を通して指導者を育成する。

②サンビレッジ茜里山再生プロジェクト

(財)サンビレッジ茜が運営する施設と連携し、昔里山であった同施設内の山林を活用し、子どもたちが主体的に豊かな里山づくりを行っていくため、その活動を支援していく指導者(ボランティア)を育成する。

2) 実施内容

①里山・里地・里川の保全のためのリーダー養成

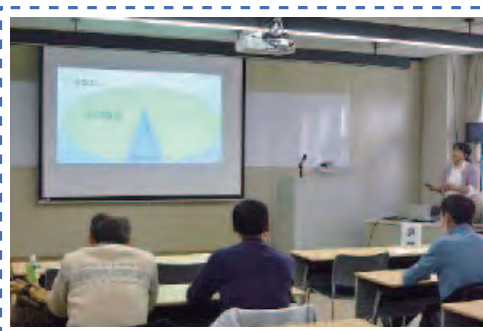
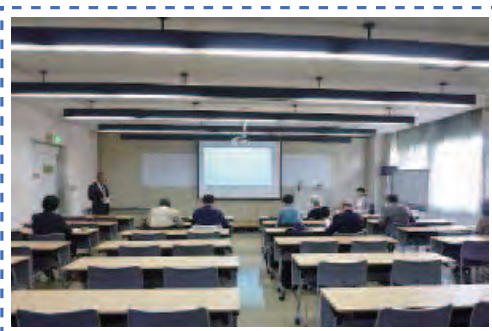
[1回目]

日時：平成25年11月24日(日) 13時30分～15時

演題：「川を支える"つながり"」

講師：九州大学大学院農学研究院 准教授 笠原 玉青

概要：生息場や物資の流れに注目して、川の働きを支える"つながり"("人と川、生物間、水の流れによるつながり)について講演する。



[2回目]

開催：平成25年12月7日(土) 13時30分～15時

演題：「水源の森から与えられる水と物質」

講師：九州大学大学院農学研究院 教授 大槻 恭一

概要：東アジアにおける森林との比較も交えながら、日本の森林の歴史と現状と課題を、水と物質の供給という観点から講義する。

②サンビレッジ茜里山再生プロジェクト

[1回目]

日時：平成25年11月2日（土）13時30分～15時

講座名：「里山再生チャレンジ講座」

講師：サンビレッジ茜里山再生プロジェクトボランティア組織「茜もりもり会」 会長 岸本 博和

概要：日本の植生について紹介するとともに里山の果たしてきた役割を評価し具体的な活動例を交えて里山再生への道のりについて講義する。

[2回目]

日時：平成25年11月9日（土）13時30分～15時30分

講座名：「里山再生チャレンジ講座」

講師：サンビレッジ茜里山再生プロジェクトボランティア組織「茜もりもり会」 会長 岸本 博和

概要：昔里山であった「茜の森」で動植物の観察を行うとともに、里山再生に向けた取り組みの現状を視察し、作業の一部を体験する。



3) 実施体制

①里山・里地・里川の保全のためのリーダ養成

福岡学習センター、九州大学大学院農学研究院

②サンビレッジ茜里山再生プロジェクト

福岡学習センター、（財）サンビレッジ茜（共催）

4) 事務局体制

①里山・里地・里川の保全のためのリーダ養成

福岡学習センター：所長、事務長、事務職員（3名）

②サンビレッジ茜里山再生プロジェクト

福岡学習センター：所長、事務長、事務職員（3名）

(財) サンビレッジ茜：理事長、専務、事務職員（1名）

2. プロジェクトの成果

1) 参加者人数

① 17名（学生：12名、一般：5名）、男性：13名、女性：4名、40歳代：1名、50歳代：8名、60歳代：5名、70歳代：3名

② 17名（学生：11名、一般：6名）、男性：14名、女性：3名、40歳代：2名、50歳代：9名、60歳代：4名、70歳代：2名

2) 目的の達成度

① 里山・里地・里川の保全のためのリーダー養成

参加者が環境保全に関する理解を深めていく段階であり、指導者の育成までには到達していない。また、今回は座学中心で計画したため、体験的な活動がなく、身近にある森林環境の現状を視察し課題を把握するといった、踏み込んだ取り組みができなかった。

② サンビレッジ茜里山再生プロジェクト

1回目では今日の日本の森林と里山について理解を深め、2回目では既に里山づくりに取り組んでいるサンビレッジ茜において里山の現状を視察し、様々な動植物の観察や作業の体験したことで、今後の指導者の育成につながるものとなった。

3) 放送大学の認知度向上

本事業の実施に際しては、学生に対する広報活動を行うとともに福岡市のホームページへの掲載や市町村立図書館等への周知やチラシの配架依頼等の広報活動を行ったことにより、放送大学が一般の方にとっても生涯学習の場であることをアピールでき、認知度の向上につながったと思われる。

ただ、一般の方に対する広報活動の中で、放送大学という名前は聞いたことがあるが、その中身までは知らないという方もかなり存在していた。

3. プロジェクトの課題

学生は、このような取り組みに馴染みがないせいか、興味・関心を示す学生は少なく、積極的に参加する者が少なかった。一般の方の参加が予想よりも少なかったことの原因の一つとして、放送大学がどのような大学なのか、また、どのような目的で実施しているのか理解できず、今回の事業への参加を見送ったようなケースがあったと思われる。今後、事業内容の充実とともに実施時期や広報の在り方、また、放送大学が外に向かって開かれた大学であることを積極的にアピールしていく必要がある。

4. 今後の展開計画

本年度の成果と反省点を踏まえ、講座の内容を座学と体験的な活動の組み合わせより、さらに興味のあるものとしたい。

「サンビレッジ茜里山再生プロジェクト」は、里山再生への道りが明確であり、当該施設における里山づくりの作業及び子どもたちへの支援活動は、指導者としての経験が少なくても活動の中で資質を高めていくことが可能であると考えられるため、当面、里山づくりの指導者の育成を先行させて実施する。

また、広報に関しては、平成26年4月から、福岡学習センターが九州大学筑紫キャンパスに移転することにより、一般の方々の放送大学に関する認知度や注目度も高まっていくものと考えられる。このことは広報活動にとっても効果的に作用するものと思われることから、学生に対する広報はもとより広く一般にも参加を呼び掛けていきたい。

5. 参加者の感想など

・川がどのような場所にあって、それが人や生物とどのようなつながりがあるのかなど今まで意識しなかったのが、その基礎を教えていただいて勉強になりました。次回はもっと日本の川を例にあげてお話していただけると、もっと身近に感じることができるようになると思います。ありがとうございました。

- ・里山とはどういう山のことかを理解することができました。自然の山の形に戻すことが自然保護につながるのではと単純に思っていたのですが、今回の講演会をきっかけにこれからの自然保護の在り方についてもっと勉強していきたいと思いました。
- ・施設のボランティアをしています。施設周辺の環境をどう改善したらよいか考えていたので、本日参加しました。施設周辺の環境を考える上で大きな示唆をいただきました。ありがとうございました。
- ・センター内で学習することが主体であったため、外に出て学ぶことに新鮮さを感じるとともに森の中にも素晴らしい学習の場があることを実感しました。もっと多くの学生が参加してほしいと思います。

6. ポスター

The image shows two posters. The left poster is for the 'Regional Contribution Project' (地域貢献プロジェクト) organized by the Fukuoka University Center for Learning and Research. It features two sessions: one on 'Supporting 'tsunagi'' (川を支える『つなぎ』) by Masahiro Kaneko (笠原 玉青) and another on 'Water from the mountains and its characteristics' (水源地の山から与えられる水と特質) by Kenji Ohtani (大隈 恭一). The right poster is for the 'Environmental Human Engineering Research Content' (環境人間工学の研究内容) - 'Safety and Efficiency in Hot and Humid Environments' (温熱環境の安全性と快適性-) presented by Masahiro Kaneko (笠原 裕) on September 7th. It includes details on time, location (Fukuoka University Center for Learning and Research), and contact information.

佐賀学習センター：大学の研究者、行政、学生の参加による調査・研究に基づいた講演会、研究発表会を実施して「地域ブランド」をめぐる地域リーダーを育成する。
(責任者 古賀所長、富田義典佐賀大学教授)

1. プロジェクトの内容

1) 目的

佐賀県では他の地域以上に少子高齢化と過疎化が進み、他方で基幹産業の農業と伝統産業の窯業は国内外の競争要因によって停滞化傾向が進みつつある。こうした中で、地域社会の活性化は喫緊の課題となっている。その課題克服策として、「地域ブランド」の確立を行政、業界、大学が一体となって取り組んでいるところである。ここに佐賀学習センターが参加することで、放送大学の地域貢献活動の展開の一つとするとともに、学生にもこの活動を通じて地域に豊かな「学び」のテーマが存在することの再認識を促すことを目的としている。

2) 実施内容

当該プロジェクトは、①フィールド・ワーク(伊万里地区と有田地区)と②地域ブランドに関わる先進地域(大分市佐賀関)の調査・研究から成る。

フィールド・ワーク1

平成25年11月26日に佐賀県伊万里市にて「JA伊万里における畜産振興と佐賀牛ブランドづくりの取り組みについて」JA伊万里・本所の担当課長による講演と畜産農家の視察

フィールド・ワーク2

平成26年2月15日に佐賀県有田町にて「地域ブランド=有田陶磁器の現状と課題」をテーマにして泉山磁石場の視察、窯元の見学、佐賀県立九州陶磁文化館での展示物見学と人間国宝井上萬二氏の講演と意見交換会

先進地域調査

平成25年11月27日～29日に大分県大分市佐賀関にて「関アジ」「関サバ」に関して大分県漁業協同組合佐賀関支店および関連施設での現場視察・聞き取り調査並びに同支店長との意見交換を通して「地域ブランド」確立に至る経緯と現状の分析

3) 実施体制

フィールド・ワーク1 (J A 佐賀中央会教育センターとの共催、佐賀大学経済学部およびJ A 伊万里・本所との連携)

フィールド・ワーク2 (佐賀大学経済学部との連携、佐賀県立九州陶磁文化館の協力)

先進地域調査 (大分県漁業協同組合佐賀関支店の協力)

4) 事務局体制

放送大学佐賀学習センター

2. プロジェクトの成果

1) 参加者人数

フィールド・ワーク1 (放送大学生1名、佐賀大学生14名、J A 長期研修生21名、J A 職員3名、佐賀学習センター教員2名、佐賀大学教員1名)

フィールド・ワーク2 (放送大学生10名、佐賀大学生15名、佐賀学習センター教員1名、佐賀大学教員1名、近畿大学教員1名) 先進地域調査 (佐賀学習センター教員1名、佐賀大学教員2名)

2) 目的の達成度

フィールド・ワークについては、参加者にアンケート調査を実施した。伊万里地区のフィールド・ワークについては、J A が生産者と一体となって佐賀牛ブランドの確立ために高品質で安全安心な畜産物の安定供給を図っていることおよびそこの課題 (特に価格の低迷) が詳細な資料に基づき説明され、その後の畜産農家の視察研修も、概ね好評で特に畜舎に入り牛の肥育が細かく「管理された」状態で行われていることに驚嘆した者もいた。ただし、講話が畜産に関するかなり高度な内容であったために参加者の中には理解困難者が若干いたのも事実である。

有田地区のフィールド・ワークについては、有田町の行政、窯業関係者を中心に地域ブランドとしての有田磁器のあり方を歴史的かつ現代的視点で問い直そうとしていることが看取された。陶工李参平の技術、有田の石・木材・水が上手く結合することで、17世紀に有田磁器 (古伊万里) を国際的に有名なブランドにしていた事実を文献史料および現物資料で確認できた。ところが最近の有田窯業は、外国産の安価な陶磁器との競争で停滞現象が続いている。今後の有田焼について、人間国宝で日本工芸会参与の井上萬二氏の講演は極めて示唆的であった。技術力、時代の要請への伝統の対応、後継者育成 (人材育成) を強調された井上萬二氏の講演内容に参加者の大いなる関心を抱かせたのである。

先進地域調査については、地域ブランド「関サバ」「関アジ」の事例は、佐賀牛のブランドづくりと比較分析すると大いに参考になる点が看取された。例えば、協同組合と組合員 (生産者) の関係において、大分県漁業組合佐賀関支店の場合、同支店自身が極めて自立的・自律的に行動し、組合員 (漁業者) 600人の魚価の高価格化=高品質化の要望に応えるべく、自ら仲買業務を行うとともに「生もの」としての時間的制約がある中で東京市場を中心市場に位置づけて戦略的マーケティングを計画・実施しているのである。佐賀牛のブランド力を引き上げる方法がここに示唆されているようである。

3) 放送大学の認知度向上

放送大学佐賀学習センターは、過去3年間、J A 佐賀中央会教育センターの研修機関として研修生 (20名) を受け入れてきた経緯があり、特に今回、3組織の学生、研修生からこの放送大学のプロジェクトを継続してほしいという期待が大きい。有田で特筆すべきことは、佐賀県九州陶磁文化館では「有田焼」関連で佐賀学習センターの面接授業を開催した経験もあり、放送大学との連携も今後考えられるであろう。

3. プロジェクトの課題

調査・研究を通じての人材育成という本プロジェクトを実施していく上で、学習センター単位では、人員（調査員、研究者等）不足の基本的問題がある。さらに人材育成の課題は長期的スパンで評価されるべきである。

4. 今後の展開計画

地域ブランドの問題は、佐賀大学を中心とした産・官・学の研究組織「佐賀地域経済研究会」の主要なテーマとなっており、それとの連携の中で佐賀県内の特産物の競争力向上のためのブランド化の試みは継続される。従って、そこにこのプロジェクトの更なる展開の可能性がある。

5. 参加者の感想

放送大学の方、JA長期研修生と一緒に、伊万里の牛を使ったハンバーグを食べることからはじまった、この地域貢献プロジェクトは私にとって非常に有意義なものでした。JAの方に直接、畜産の現状を聴くのも、白衣を着用して牛舎に入り、あんなに近くで牛を見たり、触れたりするのも初めての体験でした。JAの方からは、現在の伊万里が抱えている畜産業の問題についての話がありました。飼料の価格上昇や病気、畜産事故や利益を出す経営など、様々な不安を抱えていることがわかりました。一方で、PRの強化や畜産農家とタイアップし、連携することで何とか市場を切り開こうとしているJAさんのがんばりが見られた。また、実際の牛舎見学では去勢した牛や病気にかかった牛などを見ることができ、話に聴いていた厳しい現状も見ることが出来ました。このような機会でもない限り、なかなか経験することの出来ない貴重な企画でした。ありがとうございました。

5. 写真



写真1. JA 伊万里・本所での講話



写真2. 畜舎視察の準備

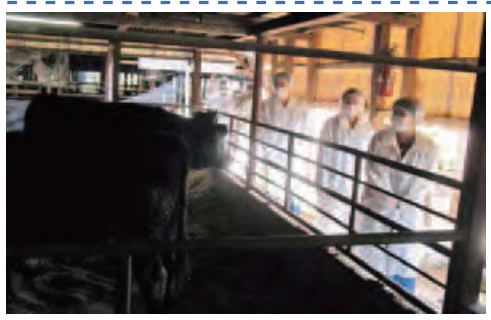


写真3. 畜舎内での肥育牛の視察



写真4. 佐賀関の畜養場での聞き取り調査



写真5. 佐賀関の関サバ、関アジの畜養場



写真6. 関アジ、関サバの商標登録

長崎学習センター：長崎大学インフラ長寿命化センターおよび長崎県と連携して、居住地周辺の構造物の異常を発見し報告することができる「道守補助員」を養成する。
(責任者 東條所長、代表者 松田浩長崎大学教授)

1. プロジェクトの内容

1) 目的

本プロジェクトは、離島面積が県面積の4割を占め全国2位の海岸線を有するなどの自然環境下にある長崎県では、塩害による橋梁等の交通インフラの老朽化が深刻な問題となっている。長崎県と連携して交通インフラの長寿命化修繕計画に取組み、この計画に参画する人材(道守)の育成計画を進めている長崎大学のインフラ長寿命化センターの協力を得て、県内各地に在住する長崎学習センター所属の放送大学学生を対象に、居住地周辺の交通インフラの異常を発見することができる「道守補助員」を地域活性化人材として育成するプロジェクトである。

2) 実施内容

開催日時：平成25年10月19日(土) 9時50分～15時50分

場所：放送大学長崎学習センター 4階実習室

プログラム：道守補助員コースカリキュラム

3) 実施体制

共催：長崎大学インフラ長寿命化センター

4) 事務局

長崎学習センター：所長・事務長以下事務職員8名

長崎大学インフラ長寿命化センター：センター長以下教員・技官8名

5) 予算

放送大学の平成25年度学長裁量経費(地域貢献枠)の配分を受け、バス借上げ料、講師旅費、講師謝金、報告書印刷費等に用いた。

2. プロジェクトの成果

1) 参加者人数 放送大学学生：14人(内女性3人、70代7人・60代6人・40代1人)

一般参加者：3人(男性60代)

2) 目的の達成度

プロジェクトの実施に当たっては、カリキュラム編成及び教材等作成までその殆どをインフラ長寿命化センターに依存する形での実施となったが、専門的な知識と活動実績に裏打ちされたプログラム内容に、受講者も異常箇所の現場写真等を豊富に取り入れた分かりやすい解説に、通常何気なく利用の道路等にも危険箇所が潜んでいることに興味深く熱心な態度で受講し、午後からの現場実習ではインフラ長寿命化センターが用意した道守活動に欠かせないヘルメットと蛍光ジャケットを身に付け異常箇所の観察と記録に熱心に取り組んだ。受講学生14人及び一般参加者3人の全員が全時間割を消化しインフラ長寿命化センターが発行する「道守補助員コース修了証」を取得した。受講者も満足がいく本学習センターの事業になったものと評価している。

3) 放送大学の認知度向上 本プロジェクトの実施に当たっては、放送大学長崎学習センター在生学生を中心に広報活動を行った関係で一般社会への放送大学の認知度向上にはつながらなかった。

3. プロジェクトの課題

離島を含む県内全域にわたる学生参加を目標に早い時期からポスターとチラシによる概要の周知とカリキュラム内容を示しての受講者募集に努めたが、各種地域行事の開催時期と重なったことなどから、特に離島在住の学生参加が得られなかった。

4. 今後の展開計画

今回のプロジェクト実施により、インフラ長寿命化センターから学生14人が「道守補助員」としてコース修了証を取得し認定を受けた。今後もインフラ長寿命化センターと連携し同コースの実施と修了証取得学生の活動状況を見たとすでの次のステップ（道守補等）の人材育成を考えたい。

5. 参加者の感想

・今回の「道守補助員コース」を受講させていただきました、ありがとうございました。これから破損箇所の写真を撮って、パソコンに入れる作業をマスターして、報告できるようになりたいと思います。授業では、がけやトンネルを見学してスケッチすることを学びましたが、ヒビの大きさを測定したり、長さも計算したりして役に立ちましたでしょうか。これからできるようになるまで、皆様のご意見も聞きながら参考にしていきたいと思います。大体どんな箇所を見ればいいのかも教えていただければと思います。これまでどんなところが報告されているのかを、教えていただければ大変助かります。

・道守の研修、楽しく勉強できました。実習する事で、危険のサインを一部でも知る事ができて良かったです。また、カーブミラーを始め、道にさしかかった木など、危険な場所を写真の画像で知らせる事ができるネットワークはすばらしいと思いました。自分だけでなく、家族、地域の安全な環境づくりに役立つように、さらに勉強して活かしたいと思います。ありがとうございました。

6. 授業内容等

今回実施した道守補助員コースは、道路関連施設等のインフラ構造物の維持管理の重要性について啓発活動を行うとともに、インフラ構造物の変状を気付くことができるような人材を養成するコースである。カリキュラムを表-1に示す。

表-1 道守補助員のカリキュラム [各講義の詳細\[PDF\]](#)

	内容	講師等
開会 9:50~10:00	●挨拶・講師等紹介	東條長崎学習センター所長
		松田インフラ長寿命化センター長
1時間目（講義） 10:00~10:20	●道守の紹介と役割 ・インフラ長寿命化センターおよび道守ユニットの紹介 ・道守補助員の役割、認定後について	森田千尋准教授
2時間目（講義） 10:20~10:40	●長崎県の道路と道路構造物の状況 ・長崎県の道路一般および橋・トンネルの状況について	森田千尋准教授
3時間目（講義） 10:40~11:10	●コンクリート構造物について ・コンクリート橋について ・コンクリートの変状について	道守 吉川國夫
4時間目（講義） 11:20~11:50	●鋼構造物について ・鋼橋について ・鋼橋の変状について	道守 山口 忍
5時間目（講義） 11:50~12:20	●道路・斜面・トンネルについて ・道路・斜面・トンネルについて ・道路・斜面・トンネルの変状について	道守 森 史朗

<p>6 時間目 (現場実習) 13:10~15:10 (移動時間も含む)</p>	<p>●道路の見守り活動について</p> <ul style="list-style-type: none"> 安全を損なう恐れのある変状について 一般知識 (安全、取組み、写真撮影、秘密保持) 通報システムについて 道守シートの書き方、提出先など 現場実習 	<p>出水 享 森田千尋 吉川國夫 山口 忍 森 史朗</p>
<p>7 時間目 15:20~15:50</p>	<ul style="list-style-type: none"> 道守シートの添削、指導 確認テスト、総括 	<p>出水 享</p>

7. 写真



事例を示して講演される吉川國夫講師



バスに乗り込む受講者



道路斜面の亀裂箇所等を観察



トンネル内の亀裂箇所や照明設備の観察



インターネット活用方法の指導

熊本学習センター：天草市およびNPO法人東アジアヘルスプロモーションネットワークセンターと連携協力して、天草の海と山と観光資源を活かした街づくりにつながる健康/環境に関する教育・学習プログラムを開発し、まちづくりのキーパーソンとなる人材を育成する。
(責任者 崎元所長、代表者 上田厚熊本学習センター客員教授)

プロジェクト名：ヘルスプロモーション ボランティア 育成プロジェクト in 天草

1. プロジェクト概要

1) 目的

本プロジェクトは、天草市の取り組みに呼応する形で、ヘルスプロモーションの理念と技術を備えたまちづくりのキーパーソンとなる人材を育成することを目的とする。

具体的には、天草の海と山と観光資源を活かしたまちづくりにつながる、健康／環境に関する教育・学習のプログラムを開発し、シリーズで5回の講義・演習・実地研修の日程を組み、ボランティア志願者（約20名）に、それを受講していただくものである。

2) 実施内容

○導入のための講義：平成25年10月21日（月）天草市立中央図書館

① 天草市が、現在進めている健康な地域づくり政策の理念と具体的な事業計画（天草市役所健康福祉部健康増進課員）

② 健康観の共有と新しい健康づくりの進め方：ヘルスプロモーションの視点からみた天草市の健康政策の意義（上田 厚放送大学客員教授）

○演習1：平成25年10月29日（火）天草市立中央図書館

① それぞれの地域での健康増進計画をみんなでつくろう（上田公代 熊本大学大学院教授）

○演習2：平成25年11月5日（火）天草市立中央図書館

② コミュニケーション能力を高めよう（河村洋子 熊本大学準教授）

○実地研修1：平成25年11月12日（火）天草市有明町

① そば栽培による地域おこし（井上幸一郎 天草そば株式会社）

○実地研修2：平成25年11月19日（火）天草市河浦町

② 地域ファンドによる地域おこし（清水菜保子 ゆずり葉代表）

2. プロジェクトの成果

1) 参加者人数等

参加者人数は、第1回28名、第2回26名、第3回19名、第4回16名、第5回20名であった。5回の平均参加者は21.8名であり、当初計画の20名程度を達成した。

2) 目的の達成度

各回終了後アンケートを実施した。5回の平均回収率83%のアンケートによると、自分の目標を達成できたかとの問いに80%以上の方が「達成できた」と答え、関心や問題意識を受講前と比べて持つようになったかとの問いに対して、80%以上の方が「持つようになった」と答え、さらに、このプログラム全体に対して受講の意義が有ったかどうかの問いに対しては90%以上の方が「意義が有った」と答えていることから、本プログラムの目的は十分達成されたと考えられる。

3) その他

講義等を5回実施したが、初回と、2回の演習の内の1回、2回の実地研修の内1回の計3回以上出席した17名の方々には、修了証を交付（郵送）し、顕彰した。

3. プロジェクトの課題

1) プログラム実施場所が学習センターから遠方であったことなど、これらの事務局業務を、学習センターの定常業務の合間に実施することは相当の負担となる。

4. 今後の展開計画

実施手法には汎用性があるので、地域活性化に熱心な行政組織があれば、対象地域を変えて、実施することは可能であるが、前記したように、事務量が過大であるので、事務補佐員を雇用して、定常業務に負担をかけな

い状態で実施する方法を検討する必要がある。

5. 参加者の感想など

参加して良かった、有意義で有ったとの感想が多かったが、講義が難しかった、趣旨が十分に理解できなかったなどという意見もあった。

6. 写真



講義を聞く熱心な参加者



ソバ畑の前で説明を受ける参加者

大分学習センター：移動博物館、講演会等を通じて、大分の自然と文化と農業に根付いた地域保全のための地域リーダーを育成する。

(責任者 五十嵐所長、代表者 永野正博大分大学准教授)

1. プロジェクトの内容

1) 目的

大分県大分市の判田地区(旧判田村)は、かつては農村地域であったが、現在は、いくつもの大規模住宅地の開発によって、新興住宅地と農村がモザイク状に配置された景観となっている。人口は約12,000人、小中学校生も1,300人を超える地域であり、多くの農村が抱える人口減少や少子高齢化の危惧はない。しかし、人は多くても、その7割強は新興住宅地住民が占めることから、地域に息づいてきた自然・文化・農業の継承断絶の現象は、多くの農村と同じ、もしくはそれ以上に深刻な問題となっている。

このような状況の改善を目的に、地元有志によって、判田校区ふるさとづくり運動推進協議会が設立された。これまで、この会は、新興住宅地の子どもとその保護者を対象にこれまで自然観察会や農業体験など(判田いきいきクラブ)を実施している。しかし、最近、継続活動参加者の減少、また、近隣小中学校の連携の希薄化が課題となっている。

また、この会の活動場所には環境省・大分県の絶滅危惧種となっているオオイタサンショウウオが生息している。しかし、水辺の管理放棄の影響によりここでのオオイタサンショウウオの生息は危ぶまれている。

そこで、本プロジェクトでは、以下の3つの活動を実施した。

【1】オオイタサンショウウオのビオトープの創造：オオイタサンショウウオの保全を目的として、ビオトープ(多様な生き物が暮らす空間)を市民協働により創造する。

【2】オオイタサンショウウオの保全のための調査・研究：創造したビオトープがオオイタサンショウウオの保全、ならびに、地域の生物多様性保全にどのような効果・影響をもたらすのかを市民協働の科学的調査によって明らかにする。

【3】ビオトープを活用した環境教育の実践：創造したビオトープを核として、近隣小中学校、判田いきいきクラブと連携して、環境教育、自然体験学習などを実施する。本プロジェクトの目的は、これら3つの活動を通じ、

①オオイタサンショウウオの保全活動の推進



チラシPDF

②判田校区ふるさとづくり運動推進協議会（判田いきいきクラブ）の活性化や地域と近隣小中学校との連携強化を進めることで、判田地域の子どもたちに地域の自然や文化の理解を深め、郷土愛を育てていく、ことである。

2) 実施内容

【1】オオイタサンショウウオのビオトープの創造

実施期間：平成25年11月7日～12月17日（作業時間のべ約500時間）

実施場所：大分市中判田1875-1番地

作業内容：

- ①ビオトープ用地の地権者との借用交渉…野尻義行と永野昌博で地権者と交渉を行い、5年間無償で借用させていただくことを締約した。
- ②ビオトープの設計作業…井戸の水量・水質調査などを行い、渇水期でもビオトープの水が枯れることのないように水路や池の配置等を設計した。また、オオイタサンショウウオ成体が森林に生息しているため、できるだけ森に近い位置に2つのビオトープを配置した。また、対照的に森から少し離れた場所にもビオトープも2つ配置して、どのようなビオトープに多くの産卵が見られるかを調べるための実験的な配置とした。
- ③ビオトープの施工作业…池堀り、井戸掘り、水路堀り、草刈り、砂入れ（水質浄化のため）、木道設置、竹柵設置、看板設置の作業をのべ100人以上、500時間以上の労力をかけて行った。この作業には学生や地元の方々の多くの有償・無償のボランティアの協力で行われた。
- ④看板設置…廃材等を用いて横180cm×高さ90cmの看板を作成し、設置した。

【2】オオイタサンショウウオの保全のための調査・研究

調査期間：平成25年12月7日～平成27年3月（予定）

調査済日：平成25年12月7日、平成26年1月6日、1月18日、2月1日いずれも8：30～10：30

調査場所：大分市中判田1875-1番地（実施内容【1】のビオトープ）

調査内容：

■オオイタサンショウウオ産卵調査

- 1) 池（ビオトープ）の周囲に立ち、池の中の卵囊を探す。
- 2) 産卵場所、卵囊数、卵の発育段階を記録する。

■水生生物多様性調査

- 1) 長方形の池（同ビオトープ）の長辺1辺に2人、短辺に1人、計6人が立ち、30秒間立ち位置を大きく変えずに網を使って池の底面を上下左右にあさり、水生生物を採集する。
- 2) 30秒の採集後、網を水中から出し、網の中の採取物（泥や落ち葉）をバットに移し、その中から水生生物を探す。
- 3) 採取した水生生物の名前を調べ、記録する。

■水質調査

- 1) 生物調査の前に、COD（化学的酸素消費量）、DO（溶存酸素量）、pH、水深を記録した。また、各池の水温と池周囲の地温はデータロガーを用いて継続測定している。

【3】ビオトープを活用した環境教育の実践

①大分大学教育福祉科学部と連携したビオトープづくりの実践

実施日：平成25年11月27日

実施場所：大分市中判田1875-1番地（実施内容【1】のビオトープ）

実施内容：大分大学教育福祉科学部環境分野の学生（4名）にビオトープづくりの実践的体験をしてもらう。指導者は、判田ふるさとづくり運動推進協議会の方々3名と大分大学教育福祉科学部准教授1名。作業内容は、井戸堀り、池堀り、池に砂入れ、竹杭設置、木道設置。

②判田小学校と連携した総合的な学習の時間（環境教育）の実践

実施日：平成25年12月6日

実施場所：大分市中判田1875-1番地（実施内容【1】のビオトープ）

実施内容：判田小学校5年生（約35人）にビオトープを観察してもらい、地域の自然環境を考え、また、今後このビオトープの活用、工夫について話し合った。指導者は判田小学校5年生担任、大分大学教育福祉科学部准教授+学生。

③いきいきクラブと連携した調査活動（地域学習）の実践

実施日：平成25年12月7日，平成26年1月18日，2月1日

実施場所：大分市中判田1875-1番地（実施内容【1】のビオトープ）

実施内容：上記【2】-①のビオトープのオオイタサンショウウオの繁殖状況調査および生物多様性モニタリング調査を通じ、サンショウウオの適した環境について考え、それに適した環境整備（サンショウウオが産卵するための枝を入れるなど）を行った。また、調査後、ビオトープの観察日記を書いてもらい、それらを素材に看板をつくった。

3) 実施体制

【1】オオイタサンショウウオのビオトープの創造

- ・判田校区ふるさとづくり運動推進協議会
- ・大分大学教育福祉科学部生態学研究室共催

【2】オオイタサンショウウオの保全のための調査・研究

- ・大分大学教育福祉科学部生態学研究室
- ・判田校区ふるさとづくり運動推進協議会
- ・いきいきクラブ
- ・大分生物談話会共催

【3】ビオトープを活用した環境教育の実践

- ・大分大学教育福祉科学部生態学研究室
- ・判田校区ふるさとづくり運動推進協議会
- ・いきいきクラブ
- ・大分市立判田小学校共催

4) 事務局体制

- ・判田校区ふるさとづくり運動推進協議会：会長，副会長（2名）
- ・大分大学教育福祉科学部生態学研究室：准教授・学生（2名）
- ・大分学習センター：所長、事務長、事務職員（3名）

2. プロジェクトの成果

1) 参加者人数

【1】オオイタサンショウウオのビオトープの創造計26名（のべ120人日）

〔内訳：20歳代男性2名，20歳代女性3名，30歳代男性1名，60歳以上男性20名〕

【2】オオイタサンショウウオの保全のための調査・研究計50名（のべ165人日）

〔内訳：15歳未満男性25名，15歳未満女性5人，20代男性3名，20代女性2名，30代男性1名，30代女性4人，60歳代男性10名〕

【3】ビオトープを活用した環境教育の実践計87名（のべ120人日）

〔内訳：15歳未満男性40名，15歳未満女性25人，20代男性3名，20代女性3名，30代男性2名，30代女性4人，60歳代男性10名〕

*いずれも放送大学学生の参加者はなかったが、本活動を放送大学の講義（対面授業）で伝えた（放送大学学生17名）。

2) 目的の達成度

本プロジェクトは、「オオイタサンショウウオの保全」と「地元住民（判田校区ふるさとづくり推進協議会）の活動の活性化と近隣小学校との連携強化による郷土愛の育成」である。

前者の成果としては、造った4つのピオトープ（水深の浅い池）のうち、森に近い2つのピオトープにおいて、2014年2月1日時点で、すでに計10双の卵囊（約1000卵）を確認することができた。現在、卵囊は順調に生育しており、予想以上のいい成果を得ることができたといえる。水生生物の多様性調査は、12月～2月の冬期間しか行っていないため、現在は特筆する成果は得られていないが、4月以降は多くの生物がこのピオトープを利用すると予想される。

後者の成果としては、ピオトープづくりでは、地元住民が指導者となり、大学生や小学生がその作業を行った。その過程で地元住民と大学生や小学生との交流の深化をみることができた。また、完成後は、近隣小学校の総合学習の時間に活用されたり、地元住民と子どもたちが一緒にピオトープの生物調査を行っている。これまでの体験だけの活動に研究活動が加わったことで、子どもたちの自然に対する興味が高まり、地域への関心も高まったものと思われる。この会は参加が年度単位であるため、当活動と参加者増の関係は来年度にならないと分からないが、隣接する小学校との活動は着々と進行しており、来年度は学校全体と連携した活動を計画している。

3) 放送大学の認知度向上

本事業で作成した、チラシ、看板等には放送大学の助成活動であることが謳われており、本活動参加者への放送大学の認知度は高まったものと思われる。また、本事業の成果を、第3回大分自然環境研究発表会（参加者80名）や希少野生動物保護推進員研修会（参加者100名）、ならびに大分大学での講義（参加者30名）で発表したことから、これらの参加者へ放送大学の生涯学習や地域貢献の姿勢が伝わったものと思われる。

また、放送大学における講義においても本活動は里山保全、環境教育の一例として詳しく紹介され、また、ホームページ等への掲載もされたことから、放送大学内（学生）に対しても活動内容の認知が高まったものと思われる。

3. プロジェクトの課題

- 1) ピオトープの維持管理を誰がどのように行うか、また、それにかかる経費について。
- 2) 体験・調査活動を通じて地元についてもっと子どもたちが楽しく習得できる仕組みづくり。
- 3) 小中学校との継続的な連携の構築。
- 4) 保護者世代（30歳代～50歳代）の活動参加促進。

4. 今後の展開計画

- 1) 本プロジェクトの活動の'【2】オオイタサンショウウオの保全のための調査・研究'と'【3】ピオトープを活用した環境教育の実践'は平成27年3月まで実施する。
- 2) ピオトープの生物調査だけでなく、調査対象エリアを判田地域全体に、調査対象種を昆虫や魚類など多様な生物群に広げていく。
- 3) 地域小中学校とも連携して、地元の知恵・知識の習得度合による称号の認定・授与制度（判田検定）を実施する。

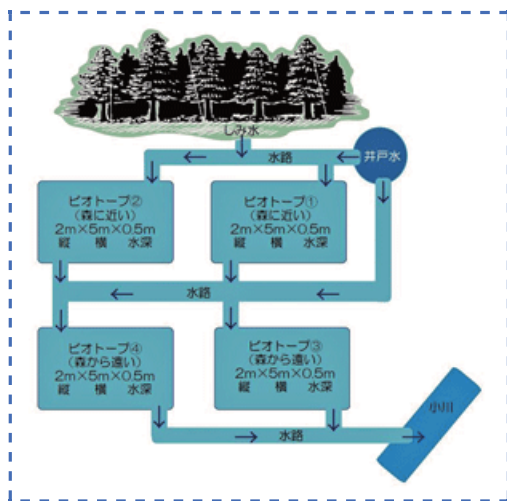
5. 参加者の感想など

ピオトープづくりでは井戸を掘ったり、木を切ったりと慣れない作業で大変でしたが、地元の方に教えてもらいながら、楽しくやることができました。また、その中で、地元（昔の）知恵や経験をたくさん教わることができました。

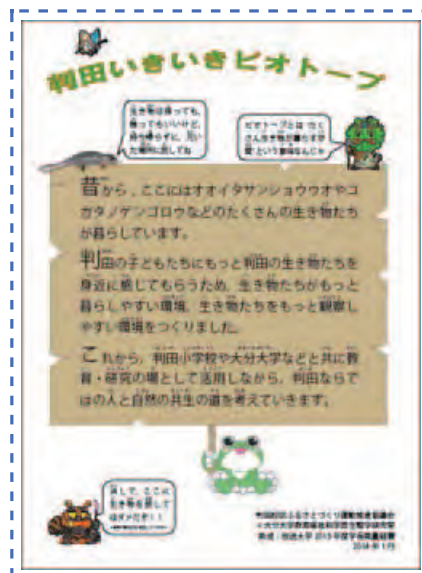
完成したピオトープでサンショウウオの卵をみつけたときはとても感動しました。卵をさわるとぶにぶにしており、早く大人のサンショウウオをみてみたいと思いました。また、これからこのピオトープにどんな生き物が現れるかとても楽しみです。

この活動を通じて、少しだけ判田の自然や生き物のことが詳しくなった気がします。また、前よりもずっと判田のことが好きになりました。これから身近な自然や地元の文化に目を向け、もっと判田のことを知りたいと思います。

6. 活動の様子



ビオトープの設計図



池掘り，砂入れ，木道整備，竹柵設置



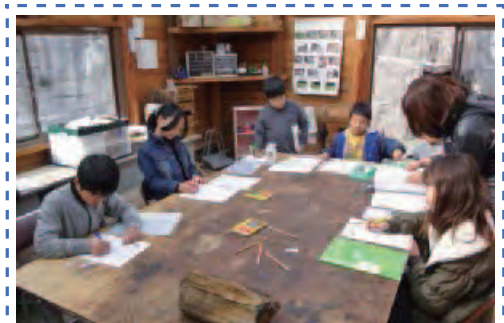
完成したビオトープ④



判田小学校5年生の感想発表のようす



いきいきクラブでの自然観察会



いきいきクラブ観察絵日記作成



調査活動成果+絵日記の看板

宮崎学習センター：面接授業「中山間地域の活性化を考える」を活用して中山間地盛り上げ隊への参加の促進と地域の活性化計画を立案すること、さらには既登録隊員への働きかけを通して今後の活動の場を設定し、その成果の教材化などを図る。
(責任者・代表者 宇田所長)

1. プロジェクトの内容

1) 目的

過疎化や高齢化などが進行している中山間地域では、集落における草刈りなどの共同作業や地域行事、伝統芸能などの維持・運営を行う担い手の確保が大きな課題となっている。このような状況に対し、宮崎県では、中山間地域でボランティア活動を行う「中山間盛り上げ隊」を組織し、市町村や集落などからの依頼に応じて、集落などで単独で行うことが困難となった各種作業などの支援活動を行っている。

本プロジェクトでは、この「中山間盛り上げ隊」の活動を題材として、面接授業「中山間地域の活性化を考える」での受講生からの提案、中山間盛り上げ隊の隊員からの意見、中山間地域の住民の考え、盛り上げ隊事務局の抱える課題など、さまざまな立場・視点からの情報を集約し、今後の中山間地域活性化の計画立案に役立てることを目的とした。そのため、次年度の面接授業での活用に向けて、盛り上げ隊の活動などを記録し、その教材化を図ることとした。

2) 実施内容

① 盛り上げ隊の活動の記録

・教材化するための素材収集として、活動の記録（静止画、動画）を行った。

なお、写真－1、2は、木城町中之又地区「中之又鎮守神社大祭（夜神楽）」の手伝い（12月14日、15日）の時のものであり、写真－3、4は、延岡市島野浦島「島野浦秋祭り」運営の手伝い（11月17日）の時のものである。その他、活動の妨げにならない範囲で、隊員へのインタビューなども行った。

② 活動の記録等の教材化

・上記の素材などを、DVD資料としてまとめ、面接授業での活用の他、学習センターにおいて、面接授業の受講生以外にも閲覧可能なようにすることを図った。なお、同DVDにあたっては、平成24年度までの過去の活動などの資料も、NPO法人みんなのくらしターミナルより提供を受けて内容の充実を図っている。



写真－1 活動の記録1



写真－2 活動の記録2



写真－3 活動の記録3



写真－4 活動の記録4

3) 実施体制および事務局体制

・宮崎学習センターを事務局とし、実施内容および経費の使用等については、高橋利行（宮崎大学教育・学生支援センター准教授、平成25年度面接授業「中山間地域の活性化を考える」講師）との相談により決定し、プロジェクトを進めた。

・宮崎県からの委託を受け、「中山間盛り上げ隊」の事務局として、活動の運営を行っているNPO法人みんなのくらしターミナルとの協力のもと、各地域での活動において、情報収集等を行った。なお、その際、活動に参加している盛り上げ隊員、活動を依頼している地域の住民の方々からも、多くのご協力がいただけたこと

で、プロジェクトを進めることができました。

2. プロジェクトの成果

1) 参加者人数

・本プロジェクトでは、講演会の実施等のイベントの実施はないため、参加者数の統計等はない。

2) 目的の達成度

・盛り上げ隊の活動の記録、隊員や中山間地域の方の意見等の情報収集を行い、DVD資料を作成するという目的は達成することができた。

・ここで教材化を図ったものを、次年度以降の面接授業で活用すること、また、DVD資料を学習センターで、多くの学生の閲覧に供することで、本プロジェクトの成果はより大きなものとなると期待される。

3) 放送大学の認知度向上

・各活動を取材する際に、放送大学の面接授業で、中山間地域の活性化を取り上げていることや、放送大学の経費で取材を行っていることを、隊員や地域の方に伝えることで、放送大学の認知度向上にも、多少の貢献はできたものと思われる。

4) その他

・当初の計画で考えていた、平成25年度の面接授業受講生と盛り上げ隊員、中山間地域の住民との意見交換会については、経費使用の制約の関係から、本プロジェクトの目的とはせずに、盛り上げ隊の活動の教材化に目的を焦点化することとして、プロジェクトを進めた。

3. プロジェクトの課題

・中山間盛り上げ隊への登録や活動への参加は、個々の自発性に基づかなければ、継続につながらないであろうし、中山間地域の方々へかえって迷惑をかけることにもなりかねない。そのため、面接授業の受講生などへ登録・参加を促すような働きかけを、どの程度積極的に行ってよいものなのかを見極めることは難しい。

4. 今後の展開計画

・作成したDVD資料等を、次年度以降の面接授業などで活用することで、受講生の中山間地域への認識を高めるとともに、よりよい活性化計画の立案を図っていく。

・学習センターで閲覧できるようにすることで、受講生以外の学生も、中山間地域への認識を高める機会を提供できるようにする。

5. 写真

・日之影町追川上地区「やまじゅう秋まつり」の準備と運営の手伝い（11月8日、9日）の記録



写真－5 活動の記録5



写真－6 活動の記録6



写真－7 活動の記録7



写真－8 活動の記録8

鹿児島学習センター：県立奄美図書館に設置した奄美再視聴室の機能の拡充と充実を行い、奄美創生にかかわる講習会・公開講座などの開発・実施を通して奄美の地域リーダーを育成する。
(責任者・代表者 菅沼所長)

1. プロジェクトの内容

1) 目的

奄美地域ふる里創生リーダーの人材育成

奄美群島地域は今年で復帰60周年を迎え、地元奄美市を中心として様々な復帰関連事業が計画されている。鹿児島学習センターは、平成15年から奄美市内に再視聴室を設置し、県立奄美図書館の新築に伴い移設し、22年度には単位認定試験にも対応できるようにしている。本計画ではこの奄美再視聴室の機能充実と拡大を目指すとともに、奄美創生にかかわる講習会・公開講座などの開催実施を通して奄美地域のふる里創生リーダーの育成を図る。

2) 実施内容

① 11月10日

奄美群島復帰60周年記念の事業として、奄美市の県立奄美図書館で、元奄美群島振興開発審議会会長・宮廻甫允氏（鹿児島大学名誉教授）による公開講座を実施した。

講演のテーマは、「これまでの奄美、これからの奄美」と題して、来年3月末に期限切れとなる奄美群島振興開発特別措置法（奄振法）の改正、延長に触れ、将来の奄美のあり方について住民の意見や要望の反映をより強調された。

また、島の顕著な動向として群島内の人口流出に歯止めが掛からない現状から、「農業、観光、情報通信」の3項目を掲げ、奄振法の方向性を講演参加者に分かりやすく説明があった。

② 3月1日

奄美群島の人々と放送大学との連携を深めるため、第2弾として、県立奄美図書館で鹿児島大学名誉教授・皆村武一氏による市民公開講座を実施する。

講演テーマは、「奄美の自立・共生・循環型社会の創造にむけて」と題して90分間の講演予定で、約50名の参加者を見込んでいる。

③ 1月11日

奄美市でNPOアマミノミライ主催シンポジウム「奄美群島における遠隔教育の未来」の中で菅沼所長が「生涯教育と放送大学」のテーマで講演を行った。

3) 実施体制

共催：鹿児島県立奄美図書館

4) 事務局体制

3名（所長、事務長、事務職員）

1名（奄美再視聴室長）

2. プロジェクトの成果

奄美群島復帰60周年記念の連携事業として、以下の公開講座・シンポジウムを実施し、地元新聞に掲載された。

①11月10日に奄美市の県立奄美図書館で、元奄美群島振興開発審議会会長・宮廻甫允氏（鹿児島大学名誉教授）による公開講座「これまでの奄美、これからの奄美」を実施した。来年3月末に期限切れとなる奄美群島振興開発特別措置法（奄振法）の改正、延長にも触れ、「農業、観光、情報通信」の3項目を掲げ、今後の奄振法のあり方について述べられた。約60名の参加者があり、翌日の奄美新聞に写真入り記事が掲載された

②3月1日に奄美など離島振興の研究者として著名な鹿児島大学名誉教授の皆村武一氏による公開講座を実施予定である。

③1月11日、奄美市でNPOアマミノミライ主催シンポジウム「奄美群島における遠隔教育の未来」の中で菅沼所長が「生涯教育と放送大学」のテーマで講演を行った。翌日の奄美新聞に掲載された。

1) 参加者人数

①11月10日

参加者数（放送大学生6名、一般52名）（男子23名女子35名）

年齢構成（30歳以下11名、31歳～60歳以下19、61歳以上28名）

②3月1日

50名を超える市民の参加を期待

③1月11日

約20名の市民の参加があった。

2) 目的の達成度

今年度の取り組みとしては、奄美地域ふる里創生リーダー向けの公開講演会を2度開催できた。講師としては元奄美群島振興開発審議会会長の宮廻甫允氏（放送大学鹿児島学習センター客員教授・鹿児島大学名誉教授）と離島振興の経済学者である皆村武一氏（元放送大学鹿児島学習センター客員教授・鹿児島大学名誉教授）を選んだことにより、講演会で紹介された地域振興策は、地元にとって「観光資源や奄美ブランドの充実を通して地元雇用や地域経済の発展につながる」ものとして喜ばれた。これら講演を通して啓発されたリーダーの今後の活躍が期待される。

3) 放送大学の認知度向上

これまで、奄美視聴室で年4回の面接授業を実施してきた。最終日に必ず一般向けの公開講演会も講師の先生に行っていたが、放送大学の認知度向上に努めている。また、今年度は、県の離島振興課が支援したNPO法人の成果発表会「奄美群島における遠隔教育の未来」のなかで、新所長菅沼が「生涯教育と放送大学」のテーマで講演を行い、放送大学の紹介を行った。

3. プロジェクトの課題

地域を活性化するには、リーダーとなる人材の養成がまず必要であるが、奄美地域には医療関連専門学校まではあるが、短大・大学等のいわゆる高等教育機関が設置されていない。放送大学の奄美視聴室のサテライト機能を充実させ、大学教育を受けたリーダーを養成することがまず課題である。

4. 今後の展開計画

奄美地域でのリーダー育成には、単なる知識供与だけでなく対話形式での授業による教育・訓練が必要と考える。その意味で、今後はテレビ会議システムを用いた面接授業の遠隔教育システムを充実し、鹿児島学習センターでの面接授業の多くを奄美でも受講できるようにしていきたいと考えている。

5. 参加者の感想など

2014年度以降の延長に向け手続きされている奄美群島振興開発特別措置法の改正・延長に触れ、将来の奄美の在り方に関し、提言内容の説明を聞いて、自分達が住んでいる奄美について以外と知らないことが多く、再確認する良い機会になりました。今後、世界自然遺産登録を目指すなら、地元の発意・創意工夫が不可欠であり、地域のリーダーを育て、若者達がいつでも帰ってこれるような働く場をもっと拡大することがとても大事であると認識しました。

今年は、奄美が復帰して60周年、先人達のお陰で今の奄美があるのだから、私はこの島を愛し、美しい環境を守り、そのまま次世代に引き継いでやるのが役目と思っています。講師のお話から沢山のご示唆をいただきました。有難うございました。

6. 写真



沖縄学習センター：21世紀を迎え、我が国の社会経済は人口減少や少子高齢化に伴う潜在成長率の低下が見込まれる一方、グローバル化による世界経済の統合が進む中で、時代の潮流を的確に見極め、自らの意思と智恵で地域社会をリードできる未来対応型リーダーの人材育成が急務となっている。このような状況を踏まえ、未来対応型リーダーの人材育成を図るため、「沖縄県の21世紀ビジョン」の行動計画に対応して、放送大学学生による農村地域の環境保全・景観創造活動等の地域実践活動への参加を行うとともに、地域の環境保全・景観創造活動計画策定に係る調査活動に参画した。

(責任者 宜保所長, 代表者 中野拓治沖縄学習センター客員教授)

1. プロジェクトのテーマ・活動内容

1) テーマ

地域実践活動と連携した新たな人材育成スキームの構築を通じた未来対応型地域実践リーダーの人材育成に寄与する観点から、農地・水・環境保全管理組織、産（地域企業）、官（沖縄県・糸満市・土地改良団体連合会）、学（放送大学沖縄学習センター・琉球大学農学部）が連携し、平成25年度糸満市地域農地・水・環境保全活動の地域実践活動において、① 安心・安全と機能性を確保した農地整備・保全管理、及び② 質循環を考慮した農村整備・資源管理の2つ課題を捉えて活動を展開した。

2) 活動内容

- 意見交換会（H25年8月26日（火））
- 第1回現地検討会（H25年10月26日（土））
- 第1回講習会（H25年11月24日（日））
- ワークショップ（H25年12月4日（水））
- 第2回現地検討会（H25年12月15日（日））
- 第2回講習会（H26年1月16日（木））
- 総括報告会（H26年2月12日（水））

- ・テーマ毎に総括報告と活動内容・成果の総括を行うとともに、来年度の進め方について討論
- ・テーマA-1：今後の地域での農業基盤整備，A-2：今後の農地・水・環境保全管理活動，A-3：今後の地域での農地保全と圃場整備，A-4：今後の地域での災害にも強い農村整備
- ・テーマB-1：今後の地域での農業生産活動と自然環境の保全・創出，B-2：今後の地域での農業農村整備と景観保全・創出

2. プロジェクトの成果

糸満市地域農地・水・環境保全活動の地域実践活動と連携した取り組み等を通じて、地域づくりに関する研修・情報発信と取組事例の共有を図り、放送大学沖縄学習センター学生、琉球大学農学部学生、行政・地域企業・土地改良区・農家・自治会・婦人会・老人会・子供会等の多様な糸満市地域の関係者が地域の課題解決につながる学習機会の場を提供することができた。

3. 今後の展開方向

農地・水・環境保全管理組織，産（地域企業），官（沖縄県・糸満市・土地改良団体連合会），学（琉球大学農学部）と連携し、今年度の活動内容の総括を踏まえ、平成26年度の活動計画として春先から通年を通じた活動を予定している。具体的には、未来対応型地域実践リーダーの人材育成プログラムを通じて、地域づくりに関する研修・情報発信と取組事例の共有を図り、生涯教育の場である放送大学沖縄学習センターの役割をさらに一層深める。さらに、糸満市土地改良区合同事務所・琉球大学農学部農地水環境学研究室と共同で本活動プログラムに係る情報発信ツールとして、ホームページ等の作成を予定している。

4. 参加者の感想など

- ・地域住民などを含めた勉強を通じて、皆が同じ意識・目標に向かうのが重要であり、今回のような取組を通じた活動等が効率的と感じた。
- ・農村整備や環境保護と口で言うのは易いですが、実際に対応するには色々な解決すべき課題があることを体感できた。

5. 写真



H25.8.26 意見交換会



H25.10.26 第1回現地検討会



H25.11.24 第1回講習会



H25.12.4 ワークショップ



H25.12.15 第2回現地検討会



H26.2.12 総括報告会

[▲ページの先頭へ](#)

プロジェクト名：熊本の近代化産業遺産による地域の活性化を目指した講演会

1. プロジェクト概要

熊本の産業遺産の一つである荒尾市「万田坑」は、わが国の近代化に大きな役割を果たし、三井三池炭鉱に現存する明治・大正期における最大級の炭鉱施設である。これだけの規模で残っている遺産は貴重であり、官民が協力して保存・維持すべき遺産である。

今回、荒尾市・同市教育委員会と放送大学の共催により、炭鉱施設としては唯一、国史跡として指定された「万田坑」を題材に、講演会を行うことで、万田坑が果たした役割や産業遺産としての価値を明らかにする。このことにより地域の文化・歴史に対する認識を深めることができる。また、わが国最大規模の堅坑である「万田坑」は、世界遺産の暫定リストに掲載されている「九州・山口の近代化遺産群」の中の一つであるが、荒尾市当局並びに地域住民の世界遺産登録への意欲は強いものがある。

今回の事業において、講演（1）では「万田坑」の施設概要や秘められた歴史、日本の工業化に果たした役割等について、講演（2）では、「万田坑」の産業遺産としての魅力を世界遺産登録につなげるために必要なこれからの取組み等について学ぶ。昨今の世界遺産ブームで関心の高まる題材をテーマに、講演会と現地見学会を実施することで、「万田坑」の理解・関心を深め地域の活性化を図るとともに、放送大学の存在と30周年をアピールする。



[チラシPDF](#)

* 関連ウェブサイトURL

[荒尾市ホームページ](#)（外部サイトへ移動します）

* 実施体制（主催、共催、後援等）

主催：放送大学熊本学習センター、荒尾市、荒尾市教育委員会

後援：熊本県教育委員会

* 事務局体制（人数等）

熊本学習センター 4人、荒尾市 10人

2. プロジェクトの成果

世界遺産登録を目指している「万田坑」の公開講演会を地元の荒尾市で実施することで、参加者が身近な万田坑の産業遺産としての役割や価値を理解し、市民が産業遺産にどのように関わりながら育てていくのかを学ぶ機会となった。また、世界遺産登録までの手順や維持管理等の諸問題について専門家の講演を聴くことで、これからの課題解決に向けた取り組みは市民や行政が一体となることが重要であることが明らかになった。各講師からの貴重な資料の提供もあり、今回の講演会で世界遺産登録の機運を高める一役を担うことができた。

3. プロジェクトの課題

今年度で連続7回目の開催を行っており、いずれも市町村及び教育委員会の理解と協力を得て盛会裏に実施することができている。この講演会を契機に学生募集へつなげる企画等の在り方について検討する必要がある。

4. 今後の展開計画

講演会の開催は集客力が期待され、放送大学の広報に効果がある。県内の各地には様々な歴史・文化（地域学）があることから、今後も各自治体と連携して引き続き実施したい。



5. 参加者の感想

(荒尾市在住：男性、50歳代) 問題点を提示しながらの説明は、とても良かった。世界遺産登録を今後一市民としてどう残していくか、講演を聴くまでは全く無関心であったことに、恥ずかしい思いがした。人類共通の遺産として万田坑を保存管理する原動力が荒尾市民との再認識できたことがうれしくなった。マスコミでは世界遺産と騒いでいるが、世界遺産の意義について認識の無さに気付いた。何も知らない事ばかりで、大変勉強になった。

6. 写真



[▲ページの先頭へ](#)

鹿児島学習センター	URL : http://www.sc.ouj.ac.jp/center/kagoshima/
プロジェクト名 : 「知ることの喜びを 学ぶことの楽しみへ」 鹿児島学習センター公開講演会	
1. プロジェクト概要	
<p>開催する地域になじみのある特色を生かした講義や日常的なテーマを設定し、地域住民への放送大学の周知を行うことにより、地域の生涯学習を担える学習センターづくりにつなげる。</p> <p>加えて、今まで知らなかったことを知る喜びにつなげ、気付きや体験をすることで、もっと学びたいという意欲を湧きおこさせ、新規入学者の増を図る。</p> <p>今回の講演会については、今までに開催したことのない県北地区(薩摩川内市) で実施する。</p>	
○公開講演会の開催	
開催期日： 平成25年8月11日(日) 13:30~16:30	
開催場所： 鹿児島県薩摩川内市「薩摩川内市川内文化ホール」	
第1部 テーマ「薩摩焼酎の歴史と文化」	
講師： 鮫島吉廣 前鹿児島大学教授・放送大学客員教授	
<p>内容： 南九州の地酒にすぎなかった焼酎が今では日本を代表する酒になりました。焼酎500年の歴史の中で製造方法や酒質がどのように変わってきたのか、サツマイモを原料とする酒造りに世界中で薩摩だけが成功したのはなぜなのかなど、焼酎の歴史を振り返りながら薩摩の風土を巧みに生かした先人の知恵を学び、焼酎だけが持つ魅力を語ります。</p>	
詳細：  薩摩焼酎の歴史と文化	
第2部 テーマ「日常生活における『情報』の活かし方」	
講師： 園屋高志 鹿児島大学名誉教授・放送大学客員教授	
<p>内容： 私たちは日頃から、テレビ、新聞、図書、インターネットなどによっていろいろな情報を得ています。これらの情報を日常生活や学校教育の中で適切に活用していく方法について学ぶとともに、情報を扱う際のマナー、ルールなどについて考えます。</p>	
配布資料：  日常生活における「情報」の活かし方	
*実施体制(主催、共催、後援等) 共催：かごしま県民大学	
*事務局体制(人数等) 3名	
2. プロジェクトの成果	
<p>事前に参加申込のない方も含め、68名の参加者であった。うち、本学学生は20名、一般の方が48名である。</p> <p>過去に公開講演会を開催したことのない地域ではあったが、県内でも酒造会社が多い地域であることから、馴染みの深いテーマや日常生活で身近にあるテーマを演題としたことで、みなさん深い興味を抱き聴講されているようであった。</p> <p>かねて学習センターまで来ることが難しい学生や放送大学を初めて知る方などにとって有意義な講演会となったと同時に地域の生涯学習を担う学習センターとしての役割を果たすことができた。</p>	
3. プロジェクトの課題	

当日、受付で学生募集の広報案内も行ったが、さらに確実な新規入学者へと繋がるようにしたい。

4. 今後の展開計画

公開講演会は、学習センターでの開催が多いので、遠方のため参加できない方や放送大学の周知のために地方での開催を今後も続けたい。

5. 参加者の感想

鮫島先生の講義では、焼酎蔵の多い薩摩川内市で鹿児島に馴染みの深い芋焼酎の歴史と文化について学びました。島津斉彬が軍需用や医薬品に使える臭くない芋焼酎の製造を始めたことや焼酎が酔い覚めの良い健康的な蒸留酒であることが分かりました。最後には焼酎の美味しい飲み方の紹介もあり、焼酎の楽しみを知ることができました。

園屋先生の講義では、教育におけるICTの活用について詳しく学べ、そのためには情報を適切に扱うための情報モラルとそれを育てるための情報モラル教育が学校教育に今後必要であることがわかりました。また、日常生活上で役立つ情報の講義もあり、自分自身も今後様々な場面で活用していければと思いました。

6. 写真



[▲ページの先頭へ](#)

資料 2

地域に関連する面接授業科目一覧

2013年度第1学期の地域に関連する面接授業科目一覧

地域	SC名	科目区分	科目名
北海道・東北	北海道学習センター	総合科目	北海道学「医療/高齢社会」
	北海道学習センター	総合科目	安心・安全な社会を目指して
	青森学習センター	専門科目: 自然と環境	白神学—白神の動物と植物
	岩手学習センター	共通科目: 人文系	日本文化の地域性
	岩手学習センター	専門科目: 生活と福祉	「健康づくり」と「地域づくり」
	岩手学習センター	専門科目: 社会と産業	スポーツと地域づくり
	宮城学習センター	専門科目: 自然と環境	地域のための地域エネルギー利用
	宮城学習センター	専門科目: 人間と文化	多賀城跡を歩く
	山形学習センター	共通科目: 自然系	自然と人間の共生—森林文化都市
	山形学習センター	専門科目: 人間と文化	考古学からみた山寺立石寺
	いわきサテライトスペース	専門科目: 社会と産業	原子力発電と地域社会
北関東	栃木学習センター	専門科目: 自然と環境	日光戦場ヶ原と周辺の植生動態
	群馬学習センター	専門科目: 社会と産業	国有林野の生物多様性復元事業
	群馬学習センター	専門科目: 人間と文化	郷土史料を読むB
	群馬学習センター	専門科目: 人間と文化	群馬の考古学1
	新潟学習センター	総合科目	歴史博物館で地域を考える
	山梨学習センター	専門科目: 社会と産業	日本経済を築いた甲州財閥
南関東	埼玉学習センター	総合科目	観光と地域
	埼玉学習センター	共通科目: 人文系	秩父の祭り
	埼玉学習センター	総合科目	埼玉の風土
	埼玉学習センター	総合科目	文学の散歩道
	千葉学習センター	共通科目: 人文系	千葉県の地域変容
	千葉学習センター	共通科目: 社会系	内発的地域生活文化創生
	千葉学習センター	専門科目: 自然と環境	環境造園学から地域を考える
	千葉学習センター	共通科目: 自然系	歩いて学ぶ房総半島の自然史
	千葉学習センター	専門科目: 社会と産業	千葉県の魅力と産業振興
	東京文京学習センター	専門科目: 社会と産業	地方自治—地域から現代を考える
	東京文京学習センター	専門科目: 社会と産業	地域情報化—現代場所論—
	東京多摩学習センター	専門科目: 人間と文化	ふるさとはどう語られたか
	東京多摩学習センター	専門科目: 自然と環境	ブナ林の自然誌
	東京渋谷学習センター	専門科目: 生活と福祉	地域による高齢者家族の多様性
	東京渋谷学習センター	専門科目: 心理と教育	地域・家族・社会の変動と教育
	東京渋谷学習センター	専門科目: 社会と産業	地域産業振興とイノベーション
	東京渋谷学習センター	共通科目: 自然系	武蔵野台地の自然史
	神奈川学習センター	総合科目	横浜新エネ散歩3

地域	SC名	科目区分	科目名
北陸・東海	富山学習センター	専門科目:心理と教育	地域文化の形成と生涯教育・学習
	石川学習センター	専門科目:生活と福祉	地域医療再生計画を考える
	長野学習センター	専門科目:自然と環境	長野県の活断層と地震
	岐阜学習センター	共通科目:社会系	日本の方言・岐阜県の方言
	岐阜学習センター	専門科目:自然と環境	岐阜の森林から自然環境を考える
	静岡学習センター	専門科目:社会と産業	地場産業・伝統産業の魅力を探る
	静岡学習センター	専門科目:自然と環境	高山植物と自然環境
	浜松サテライトスペース	専門科目:自然と環境	富士山と駿河湾の自然史
	愛知学習センター	専門科目:人間と文化	名古屋の歴史地理発見
近畿	滋賀学習センター	専門科目:人間と文化	賤ヶ岳合戦の経過と史跡
	京都学習センター	専門科目:自然と環境	人と水ー地域と地球をつなぐ
	京都学習センター	専門科目:社会と産業	日本農業の未来戦略
	京都学習センター	専門科目:社会と産業	わが国の牛肉生産の課題
	大阪学習センター	専門科目:生活と福祉	障害者の地域生活
	大阪学習センター	専門科目:人間と文化	住吉大社御田植神事
	姫路サテライトスペース	専門科目:人間と文化	城郭の歴史と姫路城を学ぶ
	和歌山学習センター	専門科目:人間と文化	戦国時代の紀州雑賀
	和歌山学習センター	専門科目:自然と環境	和歌山県の地質と災害
	和歌山学習センター	専門科目:自然と環境	熊楠ーその研究と生きざまに学ぶ
	和歌山学習センター	総合科目	日本一の梅の里で始める梅学実践
中国・四国	鳥取学習センター	共通科目:社会系	観光地域論
	島根学習センター	専門科目:社会と産業	地域経済と地域振興
	島根学習センター	共通科目:人文系	古代出雲の考古学
	島根学習センター	共通科目:自然系	山陰地方の風土と自然災害
	山口学習センター	専門科目:人間と文化	山口の歴史と文化
	山口学習センター	専門科目:人間と文化	長門北浦の暮らしの民俗
	徳島学習センター	専門科目:人間と文化	阿波の風土と年中行事
	愛媛学習センター	共通科目:社会系	グローバル時代の地域経済再生
	愛媛学習センター	専門科目:社会と産業	愛媛の風土と食生活

地域	SC名	科目区分	科目名
九州・沖縄	福岡学習センター	専門科目:生活と福祉	地域看護学
	福岡学習センター	専門科目:人間と文化	福岡の近代美術2
	長崎学習センター	専門科目:社会と産業	長崎経済の現状と課題
	熊本学習センター	総合科目	地域と連携した医療・福祉の諸相
	大分学習センター	専門科目:心理と教育	地域社会の再編と地域文化
	宮崎学習センター	専門科目:社会と産業	中山間地域の活性化を考える
	鹿児島学習センター	共通科目:自然系	鹿児島湾洋上実習
	鹿児島学習センター	専門科目:社会と産業	鹿児島の果樹(くだもの)栽培
	沖縄学習センター	共通科目:人文系	沖縄の民話
	沖縄学習センター	共通科目:自然系	沖縄の大地震と大津波
	沖縄学習センター	専門科目:生活と福祉	創齡学入門
	沖縄学習センター	専門科目:人間と文化	『おもろさうし』の世界
	沖縄学習センター	専門科目:人間と文化	沖縄の民俗文化へのいざない

2013年度第2学期の地域に関連する面接授業科目一覧

地域	SC名	科目区分	科目名
北海道・東北	北海道学習センター	専門科目:社会と産業	地域資産としての歴史的建物
	北海道学習センター	総合科目	北海道学:街デザイン/地域政策
	北海道学習センター	総合科目	北海道学:街デザイン/地域政策
	青森学習センター	専門科目:人間と文化	青森の伝統工芸あれこれ
	八戸サテライトスペース	共通科目:社会系	地域と産業:水産物の流通と加工
	秋田学習センター	共通科目:社会系	持続的地域産業の地理学
	秋田学習センター	共通科目:社会系	地域づくりワークショップ
	秋田学習センター	専門科目:自然と環境	地震災害と地域防災
	秋田学習センター	専門科目:人間と文化	日本と秋田の天文思想
	福島学習センター	専門科目:人間と文化	明治前期郡山の地域振興
北関東	茨城学習センター	専門科目:生活と福祉	地域医療再生計画を考える
	栃木学習センター	専門科目:社会と産業	社会における地域資源と人材育成
	群馬学習センター	専門科目:社会と産業	地域の課題を解決しよう
	群馬学習センター	専門科目:社会と産業	群馬の自然:保護と利用
	群馬学習センター	専門科目:社会と産業	群馬の考古学2古墳構造を考える
	長野学習センター	専門科目:心理と教育	地域社会の活性化と地域文化
南関東	埼玉学習センター	専門科目:生活と福祉	障害者の地域生活支援
	埼玉学習センター	共通科目:人文系	秩父から学ぶ郷土学-秩父の伝説
	埼玉学習センター	共通科目:人文系	埼玉県東部の民俗
	千葉学習センター	専門科目:社会と産業	地域文化の継承と創新:現地にて
	千葉学習センター	共通科目:社会系	千葉県のこれまでとこれから
	千葉学習センター	共通科目:社会系	銀座学'13-2
	千葉学習センター	共通科目:自然系	歩いて学ぶ房総半島の自然史2
	東京足立学習センター	専門科目:人間と文化	本郷<東京都文京区>の文学空間
	東京多摩学習センター	共通科目:自然系	武蔵野台地の自然史-多摩
	東京多摩学習センター	共通科目:自然系	三浦半島のバイオジオツアー
	東京多摩学習センター	専門科目:生活と福祉	看護における地区診断と健康教育
	東京多摩学習センター	専門科目:社会と産業	日本の農業、多摩の農業
	神奈川学習センター	専門科目:社会と産業	港湾活動と社会発展
	神奈川学習センター	専門科目:人間と文化	近現代史のなかの横浜
	神奈川学習センター	専門科目:社会と産業	地域で暮らすわたしたちと財政
	神奈川学習センター	専門科目:自然と環境	関東地方の地形と大地の営み
	北陸・東海	福井学習センター	専門科目:自然と環境
浜松サテライトスペース		専門科目:社会と産業	日本経済の発展と静岡地域社会
浜松サテライトスペース		専門科目:自然と環境	富士山の自然に学ぶ

地域	SC名	科目区分	科目名
近畿	滋賀学習センター	専門科目:人間と文化	近江学入門
	滋賀学習センター	専門科目:自然と環境	滋賀県周辺の地震危険度
	大阪学習センター	専門科目:社会と産業	魅力ある〈都市と景観〉とは
	兵庫学習センター	専門科目:社会と産業	美味しい兵庫の酒の造り方
中国・四国	鳥取学習センター	共通科目:自然系	人命と地域の安全・安心を考える
	鳥取学習センター	専門科目:社会と産業	創造都市論～文化による地域再生
	島根学習センター	共通科目:人文系	山陰地方の民話とわらべ歌
	広島学習センター	共通科目:人文系	認知症地域支援展開論
	広島学習センター	専門科目:社会と産業	都市・地域の発展と交通
	広島学習センター	専門科目:社会と産業	瀬戸内の産業開発と地域振興
	広島学習センター	総合科目	広島の風土と人々の暮らし
	山口学習センター	専門科目:人間と文化	柳井・周防大島の暮らしと民俗
	山口学習センター	専門科目:人間と文化	萩藩の藩財政
	山口学習センター	専門科目:自然と環境	山口の野生動物のくらしを探る
	徳島学習センター	専門科目:社会と産業	地域のまちづくり
	香川学習センター	専門科目:人間と文化	古代讃岐の歴史と観光
	香川学習センター	総合科目	讃岐高松藩の漢詩と書道
	高知学習センター	専門科目:社会と産業	地域の景観から考える土佐の風土
	高知学習センター	総合科目	住民と行政の協働のまちづくり
	九州・沖縄	福岡学習センター	共通科目:人文系
北九州サテライトスペース		共通科目:人文系	北九州の文学
長崎学習センター		専門科目:人間と文化	江戸時代の漢詩に詠まれた長崎
長崎学習センター		専門科目:人間と文化	東アジアにおける長崎の歴史
熊本学習センター		共通科目:人文系	肥後の地域と人物
熊本学習センター		専門科目:人間と文化	熊本の文学漱石から現代詩まで
熊本学習センター		専門科目:人間と文化	肥後の縄文時代
宮崎学習センター		共通科目:社会系	地域を元気にする地元学のすすめ
宮崎学習センター		総合科目	宮崎の文学と風土
鹿児島学習センター		共通科目:人文系	鹿児島の近代文学
鹿児島学習センター		専門科目:社会と産業	鹿児島の水産業
鹿児島学習センター		共通科目:社会系	鹿児島探究－歴史－
鹿児島学習センター		専門科目:人間と文化	日本神話の源流と薩摩硫黄島
沖縄学習センター		専門科目:人間と文化	奄美・沖縄の自然と人
沖縄学習センター		専門科目:人間と文化	沖縄の伝承と民俗
沖縄学習センター		専門科目:人間と文化	沖縄の生活と信仰

資料3

科目群履修認証制度（放送大学エキスパート）
地域貢献リーダー人材育成プラン

責任領域名： 地域貢献研究会

認証状の名称(日本語名)	地域貢献リーダー人材							
認証状の名称(英語名)	Community leader course							
認証プラン名	地域貢献リーダー人材育成プラン							
(認証の教育目標と社会的意義)								
わが国では、環境、教育、福祉など様々な領域に生じる問題について、住民がその解決に積極的に取り組む動きが広がっている。住民は地域知を持っていると同時に、取り組みにかかる当事者性が強く、地域社会の課題解決への貢献の可能性は大きい。本プランは、地域の課題解決に資する科目群と課題解決を実践する組織づくりの担い手の育成に資する科目群を配置し、それらの授業科目の履修を通して、地域社会の課題解決に向けて主体的に取り組むことのできるリーダーの育成を目指す。								
(認証取得条件)								
授業科目群50単位の中から20単位以上を修得すること。								
認証の種類 (1) 領域単独型 (2) 領域横断型	(2) 領域横断型							
授業科目群の構成								
	科目名	テレビ /ラジオ	科目 区分	分野もしくは コース名	単位数	必修 科目等	履修 制限	備考
1	市民と社会を考えるために('11)	R	基礎	基礎科目	2			
2	現代の生活問題('11) 現代の生活問題('07)	R	共通	一般科目(社会系)	2		有	
3	社会学入門('10)	T	共通	一般科目(社会系)	2			
4	リスク社会のライフデザイン('14)	R	専門	生活と福祉	2			
5	人口減少社会のライフスタイル('11)	T	専門	生活と福祉	2			
6	地域福祉の展開('14) 地域福祉の展開('10)	T	専門	生活と福祉	2		有	
7	現代の生涯学習('12)	R	専門	心理と教育	2			
8	地域社会の教育的再編('12)	T	専門	心理と教育	2			
9	現代都市とコミュニティ('10)	T	専門	社会と産業	2			
10	安全・安心と地域マネジメント('14)	T	総合	総合科目	2			
11	市民と社会を生きるために('09)	R	基礎	基礎科目	2			
12	問題解決の進め方('12)	T	基礎	基礎科目	2			
13	社会調査('09) 社会調査('05)	T	共通	一般科目(社会系)	2		有	
14	生活知と科学知('09)	T	専門	生活と福祉	2			
15	市民のための健康情報学入門('13)	R	基礎	基礎科目	2			
16	社会福祉入門('12) 社会福祉入門('08)	T	共通	一般科目(社会系)	2		有	
17	市民社会と法('12)	R	共通	一般科目(社会系)	2			
18	子どもの生活と児童福祉('11)	R	専門	生活と福祉	2			
19	高齢者の生活保障('11)	T	専門	生活と福祉	2			
20	障がいのある生活を支援する('13)	T	専門	生活と福祉	2			
21	市民生活と裁判('12)	T	専門	社会と産業	2			
22	現代環境法の諸相('13)	T	専門	社会と産業	2			
23	NPOマネジメント('11) NPOマネジメント('07)	R	専門	社会と産業	2		有	
24	アグリビジネスと日本農業('14)	R	専門	社会と産業	2			
25	環境デザイン論('09)	T	専門	社会と産業	2			

資料4

地域貢献研究会構成員リスト

2013年度 放送大学地域貢献研究会 構成員

	所属	氏名	専門分野
座長	副学長	小寺山 亘	海洋工学
	副学長	來生 新	法律学
	専任教授	宮本 みち子	社会学・生活経営論
	専任教授	奈良 由美子	生活環境学
	専任教授	河合 明宣	農業経済学
	北海道学習センター 所長	筑和 正格	社会学・ドイツ文学
	山形学習センター 所長	飯澤 英昭	経済学(国際経済学・カナダ経済・加米関係)
	埼玉学習センター 所長	菅野 峰明	人文地理学
	静岡学習センター 所長	高木 敏彦	園芸学
	和歌山学習センター 所長	竹内 昭浩	情報工学
	高知学習センター 所長	石川 充宏	金属造形 鍛金
	熊本学習センター 所長	崎元 達郎	構造工学、地震工学、維持管理工学
	総合戦略企画室長	島 竜一郎	
	学務部長	松谷 治	
	学習センター支援室長	妹尾 剛	

地域貢献研究会における議論と学習センターのプロジェクト報告

編集・著作：放送大学 学務部学習センター支援室
総合戦略企画室

〒261-8586 千葉県美浜区若葉 2-11

電話：043-298-5111

FAX：043-298-4545

発行：2014年6月

